國語讀本

改訂版

巻七

375.9
Uc4
資料室

41490
教科書文庫
4
810
41-1929
200030
1419

資料室

375.9
Ue 6

昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國語讀本 卷七

昭和改訂版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共
鹽野新次郎 編

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 34504 圖書

國語讀本 卷七

目次

前篇

一 國語 一

和歌三首 九

二 男性美 笹川臨風 九

男で御座る 大町桂月 一四

三 都會風景 千葉龜雄 一五

四 現代生活と古典 大類伸 二六

和歌一首 落合直文 三〇

五 百蟲譜　横井也有　三〇
鼠を責むる詞　四方赤良　三五
六 詩二篇　三六
亂雲落日　尾崎喜八　三六
月かゝりて空に　福田正夫　三八
七 旅行論　山路愛山　三八
八 芭蕉の生活とその俳句　荻原井泉水　四四
九 奥の細道　松尾芭蕉　五三
涙ぐましい旅の心　相馬御風　六〇
一〇 蕉風（俳句）　六六

一一 「芳流閣」とその批評　瀧澤馬琴　大町桂月　六七
一三 戯作三昧　芥川龍之介　七六
一三 たけり猪（和歌）　八五
一四 川柳點　金子元臣　八九
川柳七句　九七
一五 光頼參内　（平治物語）　九七
公家に關する語　一〇七
一六 方丈記　鴨長明　一〇七
方丈記の體製　五十嵐力　一一七
一七 ベートーヴェンの一生　中澤臨川　一二八

一八　苦患と歡喜　和辻哲郎　一三八

後篇

花月草紙抄

花月草紙に就いて（參考）　三上參次　一

一　序　一

二　なしと聞けば　五

三　月のさしのぼる頃　五

四　親に孝する　七

五　かの人は　八

六　ひでり續く頃は　九

七　月の夜半こそ　一〇

八　ことわりなきが　一一

九　傍より　一五

一〇　四つの時　一六

一一　酒過ぐれば　一六

一二　道路は　一七

一三　目しひしもの　一七

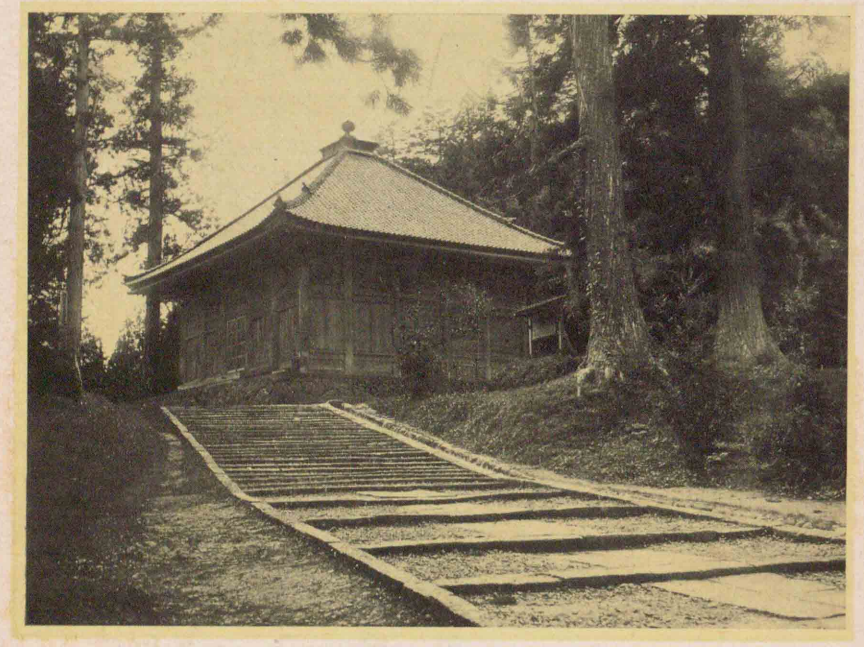
一四　月なき夜半は　一八

一五　凡そ躬行にてもあれ　一八

一六　友に交る道　二〇

一七　閉藏の氣　二二
一八　わが悪しきをば　二三
玉勝間抄　二四
玉勝間に就いて（參考）　柚利淳一　二四
一　古書どもの事　三〇
二　あらたなる説を出す事　三一
三　道にかなはぬ世の中のしわざ　三三
四　道をおこなふさた　三三
五　ふみ讀むことのたとへ　三四
六　新に言ひ出でたる説は頓に人のうけひかぬ事　三五

七　おのが物學びのありしやう　三七
八　縣居の大人の御さとし言　四二
九　師の説になづまざる事　四五
一〇　わがをしへ子に誡めおくやう　四七
一一　ひとむきにかたよることの論ひ　四七
一二　前後と説のかはる事　四九
一三　書うつし物書く事　五一
一四　手書く事　五二
一五　花のさだめ　五三
一六　歌も文もよく整ふは難き事　五五



—金色堂—

目次

一七 道のひめごと 五六
一八 物學びは其道をよく擇びて入り初むべき事 五七
一九 おのが京のやどりの事 五八

廣島大學圖書之印

秋時

國語讀本　卷七

前篇

一　國語

我が日本國は、一家族の發達して一人民となり、一人民の發達して一國民となれる者にして、神別・皇別・蕃別の名はあるものの、實は今日となりては、すべて此等を鎔化し去りたるなり。こは實に國家の一大慶事にして、一朝事あるの秋に當り、我々日本國民が協同の運動をなし得るは、主としてその忠君愛國の大和魂と、この一國一般の言語とを有つ大

化身
權化

和民族なるに因りてなり。故に我々の義務として、この言語の一致と人種の一致とをば、帝國の歴史と共に、一歩もその方向より誤り退かしめざるやう勉めざるべからず。かく勉めざる者は、日本人民を愛する仁者にあらず、日本帝國を守る勇者にあらず、まして東洋の未來を談ずるに足る智者にはゆめあらざるなり。

さて、一人民が話す言語とその人民の性質との間には、最も入り組みたる關係あるものにて、その人民が一事物に對して感じ或は考ふる上の總ての事は、皆その言語に反射し出づるなり。故に予輩は、言語をば、その話す人の精神上に生活する思想及び感情が、外に出でて化身したるものと見做すに躊躇せざるなり。

サンスクリット Sanskrit
分析
綜合
長所
短所

試みに支那語を見よ。如何に仁義の說が彼等の間に行はれしかは、歴史を待たずして言語の上に明かなり。試みにサンスクリットを研究せよ。如何に古代の印度人が分析的能力に富みしかは、彼等の哲學書・宗教書・言語學書等を繙くまでもなく、其の語彙のみの上よりも斷言し得べし。文人國に詩歌の語多く發達し、武人國に武人の語多く繁昌す。希臘語は古代の哲學・美術の言語なり。羅甸語は中古の法律・宗教・文學の言語なり。英語の商業に於ける、佛語の社交に於ける、獨逸語の理論に於ける、皆それ〴〵其の人民の長所によりて發達したるものなり。

慶報
吉報

言語は、これを話す人民に取りては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、これを日本國語にたとへていへば、日本語は日本人の精神的血液なりと謂ひつべし。日本の國體は、主としてこの精神的血液にて維持せられ、日本の人種は、この最も強く最も永く保存せらるべき鎖のために散亂せざるなり。故に大難の一たび來るや、この聲の響く限は、七千萬の同胞は何時にても耳を傾くるなり、何處までも赴いて、飽くまでも助くるなり、死ぬるまでも盡すなり。而して一朝慶報に接する時は、樺太のはても臺灣朝鮮のはしも、一齊に君が八千代をことほぎ奉るなり。もしそれ此の言葉を外國にて聞く時は、

標識
標章
旗幟

…と…とを

ムッター・スプラッハ
Muttersprache.

こは實に一種の音樂なり、一種天堂の福音なり。

かくの如く、その言語は、單に國體の標識となるのみにあらず、又同時に一種の教育者、所謂なさけ深き母にてもあるなり。我々が生るゝや、この母は我々をその膝の上に迎へ取り、懇ろにこの國民的思考力と、この國民的感動力とを、我に教へ込みくるゝなり。故にこの母の慈悲は、誠に天日の如し。苟もこの國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるものは、誰かはこの光を仰がざるべき。獨逸にこれを「ムッター・スプラッハ」或は「スプラッハ・ムッター」といふ。先なるは「母のことば」後なるは「ことばの母」の義なり。よく言ひ得たりといふべし。

終日
終夜

されば、言語の上には、我々が心中に一日も忘れかぬる生活上の記念、殊に人生の神世とも謂ひつべき小兒の頃の記念が、結び附き居るものと知るべし。我々が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて、すや〳〵と眠に就かんとせしをり、母君は如何に優しき聲にて、ねよとの歌を謠ひ給ひしか。頑是なき小兒心にわるふざけなどして打廻りし時、父君は、如何におごそかに教訓を垂れ給ひしか。さては隣家の垣に攀ぢて栗の實を拾ふに餘念なく、或は春のうらゝかなる野邊に、幼き友どちと蓮華草など摘み歩きたる、すべて當時より使ひ來れる言葉は、當時の人名・地名と共に、何とも言はれぬ快感を我々に與ふるなり。續いては小・中學校の言葉、長

束縛
拘束

選擇
取捨

じては學生の言葉、市民としての言葉、或は職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それ〴〵の生活をこの上に反映す。所謂「言語は其の話す人を束縛す」とは此の事なり。故に外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて、外國語の教育のみを受けたる人にあらざるよりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざるものなし。

そは如何にまれ、此の自己の言語を論じて、その善惡をいふは、なほ自己の父母を評するに善惡を以てし、自己の故鄕を談ずるに善惡を以てするに均し。理を以てせば、或は然らざるを得ざらん。而もかくの如きは、眞の愛にはあらず。眞の愛には選擇の自由なし、なほ皇室の尊愛に於けるがご

確乎
牢乎

とし。この愛ありて後、始めて國語の事談ずべく、その保護の事亦計るべし。

されば、國民がその國の言語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ず自國語を尊び、決して之を措いて他の外國語を尊奉せず。情の上よりその自國語を愛し、理の上よりその保護改良に從事し、而して後この上に確乎たる國家教育を布くを常とす。こは言ふまでもなく、苟も國家教育が、その國家の觀念の上より、その一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、そは先づその國の言語、次にその國の歷史、この二つを蔑にしては、決してその功を見ること能はざればなり。これ我が國民たるものの、須臾も忘るべからざる所なりとす。

笹川臨風
名は種郎、東京の人、文學博士。

○

枕詞
そらみつやまとの國は　すめ神のいつくしき國　言靈
のさきはふ國と　語りつぎ言ひつがひけり　（山上憶良）

序詞
とつ國に生ひぬ櫻のかげしめて群れつゝうたふやまと言の葉　（村田春海）

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは　（荷田春滿）

二　男性美

笹川臨風

何をか男性美といふ。氣象の天空海闊なるにあり。勇決果斷なるにあり。秀吉曰く、我

小牧山　愛知縣西春日井郡小牧町にあり。
千利休　名は宗益、茶人、千家流の祖。
佐久間玄蕃　柴田勝家の甥、驍勇を以て聞ゆ、賤ケ岳の役に捕へられて斬らる。
進退趨舍

に謀反するものはよもあるまじ、我ほどの主はあるまじきものをと。秀吉は男性美を發揮したる一人なり。彼の度量は大に、胸は廣かりき。よく清濁併せ呑むの概ありき。小牧山の役、秀吉、千利休の茶會にあり。戰起ると聞くや、勇決果斷、そのまゝ立上り、尻をまくりて、えいや〳〵とて出陣せり。賤ケ岳の戰には、疾風迅雷の如く進軍し、須臾にして金瓢の馬表、岳麓に現はれ、佐久間玄蕃をして進退度を失はしめたり。

男性は義俠心あるべきなり。然諾を重んじ、他人の急に走り、利害の打算以外に、面白き氣象あらざるべからず。往時わが國に男伊達といへるものありき。多くは市井の徒にして、中には無賴漢もなきにあらず。その道德も偏頗にして、識見も高からざりしが、その勇氣ありて、水火も辭せざる底の心意氣に至りては、誠に欽すべきものありき。威武に屈せず、權貴を恐れず、自家の利益を犧牲

模糊　摸稜

にして他を濟ふの氣魄に至つては、また江戸時代の名物たるに恥ぢずと謂ふべし。

男性は能く責任を知る。事を曖昧模糊に附するは男子のなすべき所にあらず。人の臣としては人の臣たる責任を知り、人の將たらば人の將たるべき責任を知る。學生としては學生の責任を知り、子としては子の責任を知る。すべての人が皆この責任を知らば、國家の運は隆々として旺なるべく、社會の文化は駸々として進むべし。野球の如き、庭球の如き、漕艇の如き、各人その責任を知つて之を盡すを以て、その遊技に統一あり興味あり。若し個々勝手の事をなして、その責任を蔑にせば、到底行はるべきものにあらず。遊技には獨り責任を知りて、其の他には責任を忘れんとするが如きは、思はざるの甚だしきものなり。

男性の美なるは、常に後暗からざるにあり。後暗きものは、兎角

左顧右眄　左思右想
光明正大　公明正大

に隱れんとし、左顧右眄して、敢へて進まざるなり。男子は光明正大、皎々として白日の如くなるべし。自ら潔きものは進むに勇あり、事をなすに恐るゝ所なし。孟子曰く「自反而不縮、雖褐寬博、吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人、吾往矣」と。人誰か過なからん。過を悔ゆるが男らしき所にして、男性美の存する所なり。古聖人は云へり、「過則勿憚改」と。又曰く「君子過如日月食」と。非を遂げ過を隱しおほせんとするは、畢竟自ら難地に踏込んで、常に後暗き思をなすものなり。過あらば直ちに之を悔い、悔いて之を改むるを勇ありとなす。過は日月の蝕するが如く、浮雲の翳すが如し。之を改むれば、又赫々として光明あり。

古聖人
孔子を指す。

渴仰
渴望

男性美は、その男らしきによりて現はる。英雄といひ、偉人といひ、君子といふ、皆男性美を發揮したるによりて、他の渴仰を受くるなり。

貫徹
達成

彼の蒼
彼蒼者天、曷其有極。（韓愈、祭十二郎文）

永遠
永久
悠久
久遠

古の氣概あるもの、識見あるものは、自ら稱して大丈夫といへり。大丈夫とは、「ますらを」なり、男子なり、眞男兒なり、最も能く男性美を發揮するものをいふ。自ら大丈夫とし信ずれば、時に遇ふと遇はざると、運と不運と、皆問ふ所にあらず。自家が信ずる道に進み、その所信を貫徹するに於て、最も勇あり、斷あるなり。余は今の青年が、常に自ら大丈夫を以て任じ、その男性美を發揮せんことを切望せずんばあらず。

彼の蒼たるものは天、我等が住める大地すら、既に滄海の一粟に過ぎず。況んや我が生の須臾なるに於てをや。然れどもその須臾なるとその滄海の一粟たるとは、問ふを要せず。男性美は宇宙に於ける一奇觀なるべきなり。感化は永遠なり。男子の事業は悠久に亙りて渝らざるなり。我等は男と生れたるを誇とす。男にして男らしからずんば、寧ろ男たらざるに若かず。既に男とし

て生れたる以上は、男性美を發揮せずんば、男としての生れがひなきなり。

男子としては眞男子たるべし。大丈夫たるべし。人の褌を以て相撲を取る勿れ。我が力を頼みとし、我が生の眞面目を發揮し、我が事業をして久遠の事業たらしめよ。一時は花の如し、永遠は果實なり、種子なり。（男性美）

○

「天河屋義平は男で御座る。」痛快なるかな言や。世には聖人を氣取るものあり、君子を氣取るものあり、英雄を氣取るものあり、豪傑を氣取るものあり。更に下りて才子を氣取るものあり、更に一層墮落して通人を氣取るものあり。吾人は必ずしも氣取ることを止めよと言ふにあらず。されど何人も「男で御座る」の觀念を有したきものなり。

古來東洋の習慣にて、「めゝしい」の語に對して「男らしい」の語あり。小兒泣けば勵まして曰く「泣くな、男の子なり」と。かくて多くの小兒は泣を止む。この觀念は年長じても衰へず、何人も「女の腐つたやうなり」と言はれて恥ぢざるものなし。「男で御座る」の一念、心に燃ゆれば、自ら行にあらはる。一人前の立派なる國民としては、それで十分なり。

（男で御座る――大町桂月）

天河屋義平　淨瑠璃「假名手本忠臣藏」に、天野屋利兵衛に擬したる人物。利兵衛は大阪北組の郷長、大石良雄の託を受けて、赤穂義士の兵器を調達せし人。

千葉龜雄　秋田縣の人、大阪毎日新聞記者。

銀座　東京市京橋區。商業地として市中最も高級繁華なる處。

心齋橋　大阪市南區。心齋橋と戎橋とを貫ける街路。心齋橋通の略。大阪第一の繁華の地。

六大都市　東京・大阪・京都・名古屋・横濱・神戸。

三　都會風景

――銀座と心齋橋――

千葉龜雄

千葉龜雄

◇

銀座と心齋橋とを較べて來て、誰にも氣のつくことは、町幅の廣狹が、どんなに觀望者の心理を變化させるかといふ事であらう。自分の心齋橋での第一印象は、町幅の恐ろしく狹い事であつた。六大都市中、繁昌の中心地で

ある市街で、こんなに町幅の狹いところは斷じて無い。その點では、名古屋などはまあ理想的だ。銀座も理想的ではないが、まあ廣い。尤も、銀座は盛り場といつても、舊新橋停車場が無くなつた今日では、東京市の全型から見て、ひどく偏つて居る。然るに心齋橋は、擴がつて行く大阪市の要衝とはいへなくとも、銀座のやうな偏僻ではない。もつと〳〵繁昌する可能性があるのに、あの狹い町幅だけは、もうあれ以上どうする譯にも行かぬといふのだ。地價があまり高いので、收用して道路を造る事も出來ず、また、心齋橋を中心として、住家や店舗が過度に密布して了つた爲に、それと氣が附いた時は、どう擴げるわけにも行かなかつたといふやうな譯もあつたらう。その狹い、饂飩のやうにべらぼうに長い一筋の通りを、數知れぬ人波が、ひた押しに押して、心齋橋を前後に往復するのだから、どうにもかうにもゆとりが取れない筈だ。それに道路が、

彳徊
徘徊
顧望

モザイック
Mosaic.

縞目も區ぎりもない一面のアスファルトで固められて居る。これがまた自分等にゆつとりした感じを失はせる。その代り、雨の場合などには、水が流れ、泥が洗はれるから、それだけはアスファルトもよいが、どうもアスファルトといふやつは、踏んだ氣持に彈力がない、屈撓性がない、機械的だ。急ぎ足で歩いて行くにはよいが、低徊したり散歩したりするにはどうも不向だ、無趣味だ。

それに比べると、銀座通りは違ふ。たしか京橋・日本橋の店の前の鋪裝は、その店の出資で拵へるもののやうに記憶するが、それだけ、多少の趣味が見える。石だたみではあるけれども、碁盤型、格子型のモザイックは、いかにも都市的均整を味はせるし、又あの灰白な色彩は、アスファルトの、死のやうに黑い、壓迫する無趣味な感覺とは違つて、複雜した沈靜性を齎して來る。萬遍なく水がまかれてある上に、電燭が濃く淡く投影した感じもかゞやかしい。

銀座の石だたみの外は、電車道を挾んで木道がある。木煉瓦は、雨で浮上るの何のと非難はあつても、自分には、やはり木道がいかにも親しまれる。大地とはまた違つた柔な反應力と彈力が好ましいのだ。

◇

東京の銀ブラに對して、大阪の新語研究者が、心齋橋に對して、どんな形容詞を與へたかは知らない。或は「心ブラ」といふ假稱も聞いたやうだが、少くとも、こゝでは「ブラ」といふ氣分があまり得られない。いはゆる「ひやかし」の色調を味ふには、大阪人の氣分はもつと忙しく何物

銀座街頭

弛緩
緊張

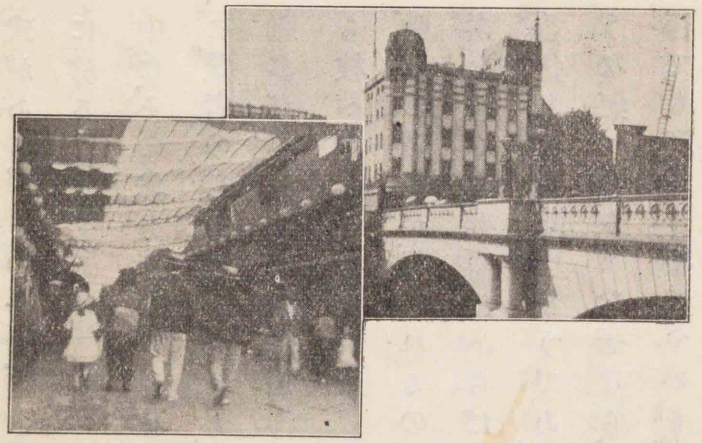
刺戟
刺激

にか働きかけて居る。一體、心理を弛緩させる要素には、二つの形式がある。その一は、甲の一つの氣分から、乙の一つの氣分に純一に移ること。その二は、一つの氣分から、出來るだけ雜多の氣分の中に、その氣分を浸し、融け込ませ、放散させることだ。銀座は明かに後者の役目をつとめる。銀座が持つ都市的色彩と內容は實に雜多だ。神經と感覺が、浮氣な小鳥のやうに、とりとめなしに枝から枝へと移させられる。結局何を得たといふことなしに、立派に弛緩の滿足が得られるのだ。無意識と無努力が休養の大きな要素をつくるものだからだ。

併し、心齋橋はどうであらう。心齋橋は、どうも放心に歩けぬやうな氣がする。なぜなら、あの狹い町幅を挾んで、心齋橋逍遙者を否でも應でも壓迫するものは、購買心理だから。買はせる心理だから。いやでも消費したいといふ心理を刺戟し、いらだたせるの

觀賞
鑑賞
觀照

だから。心齋橋ではあの長い〳〵町筋を通じて、のしかゝるやうに兩側に並んで居るところの、商店の商品以外には、通行する人々の心象を捉へる特殊のものが格別見えないからである。



心齋橋通

こゝでの家屋や店舗の構造は、可なり手廣でもあり、手も金もかゝり、又頑丈で、くすんで、凝つた高價な本物の日本式建造もある。けれども、こんな狹い道幅では、視角の距離が餘り近いのと、佇んで觀賞する餘裕を許さぬ點で、建築に就ては、大して自覺的な意識と興味を通行人にそゝらぬであらう。どうしても視角の並行線が、各商店の店頭に盛られた商品だけに向けられる結果となる。その點が、大阪式だと云はゞ云へるであらう。

◇

銀座や心齋橋逍遙の一つの有力な目的は「人を見る」といふ事であらう。これだけは共通する。人を見に行つて、見られに行く。さうした人の渦が、客觀的に興味の主要分を占める。銀ブラの一つの目的は、たしかにそれだ。と云つても、銀ブラの、見られる人、見る人と、心齋橋のそれとには、そこに兩都を代表するところの全く違つた色彩がある。

銀ブラでは、吾等は東京人の一種の貴族趣味と、勇敢な流行の先驅者をそこに發見する。別の言葉でいへば、吾等は、銀ブラでは、東京文化の一標本、もしくは時代粧の前衞たる色ごりを、たやすくそこに發見し得るとも云へる。そこでは、都會人の顏貌や新裝飾な

山の手　東京市の西部及び北部の高地、主として住宅地。

下町　東京市の東部及び南部の低地。主として商業地。

どが萬華鏡のやうに花やかに展開される。又そこでは、山の手人、下町人、その他一定された階級の標本がそれ〴〵に採集される。

けれども心齋橋へ來ると、銀ブラで求められるやうなものが、もう餘りに求められない。たゞ強く心を撲つものは、大阪はなるほど平民の都市であるといふ感じである。そこには、階級とか差別とかいふものが、東京のやうに、それほど強烈に感じられない。服裝、裝飾、流行、その他においても、個人と個人との間に大した違ひがない。それと共に、身柄の尊卑、貧富の區別も、どうもはつきりと分らない。理由の一つは、銀ブラが、より多く文化民の領土であるのに對し、心齋橋が、大阪全市民の心齋橋であるといふ差異から來るのではなからうかとも思はれる。かうした意味では、大阪は氣の置けない氣樂さが快く味はれる。たゞいくらか淋しいのは、銀座などに比べて、若い男女學生が目立つほど少いことである。その代り、俸級生活者（サラリーマン）や家庭婦人の影が一番多いのは、やはり實際的な大阪氣分を代表して居るとも云へようか。

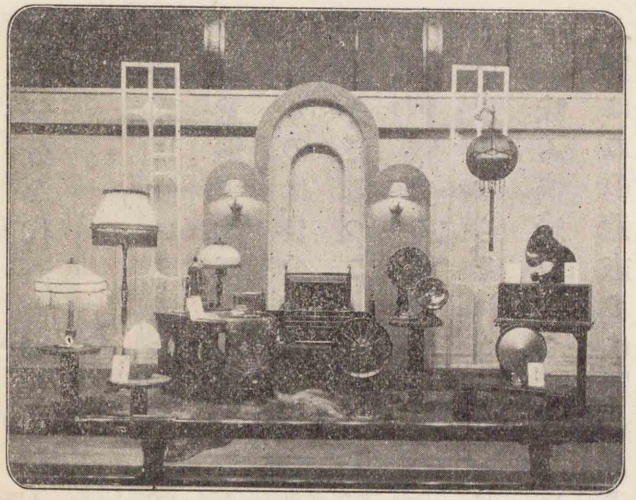
云へよう。

◇

商利に鋭いと云はれる大阪、その目貫たる心齋橋の商店で、飾窓の美意識と意匠に大した力を籠めてないのは不思議である……と見るのは、自分の不詮索だらうか。もし、さうではなく、飾窓などいふまだるつこい手段が、大阪人の趣味に適しない、いきなり購買力を刺戟するやうに、店頭から、たゞ商品をこて〳〵と並べてあるといふのなら、それもさうかと合點して止むであらうが、吾等が銀座で味ふ快感の一つは、何といつても、あの飾窓の意匠である。買ふ買はぬの意志とは別に、あの意匠を凝らした示唆（ショウヰンドウ／ディスプレイ）が、商品に對する新知識や新見聞を廣めさせるだけでも、銀ブラ黨を益することはどれほどか知れない。或研究家に云はせると、外國の諸都市を

示唆　教唆

あるいて來て、銀座の飾窓をのぞいて見ると、文明國の最新式商品は、必ず一つづつどこかの飾窓の中に飾られてない事はないといふ。そんな事からも、銀座の飾窓觀賞は、大きな意味を持つものだ。しかし、そんな設備を必要としないのが大阪の特色であるといふならば、それも亦一つの特色として面白からう。

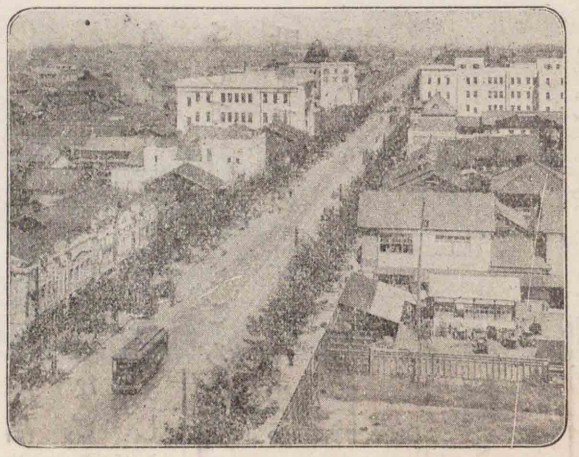


銀座松屋の飾窓（電氣器具の陳列）

◇

東京から名古屋へ來る。また東京、名古屋を經て大阪に來る。三つの都市が、皆それ〴〵に違つた形態の文明をもつて延びて來るのを見るのは、何よりの歡びでなければならない。とりわけ、名古屋が大名古屋になり、大阪が、大大阪にならうとして居る潛勢力が、ほのかに地下から湧き上つて居る暗示は、吾等のやうな異鄕人にも驚異の眼を睜らせる。

タクシイ
Taxi.



名古屋廣小路

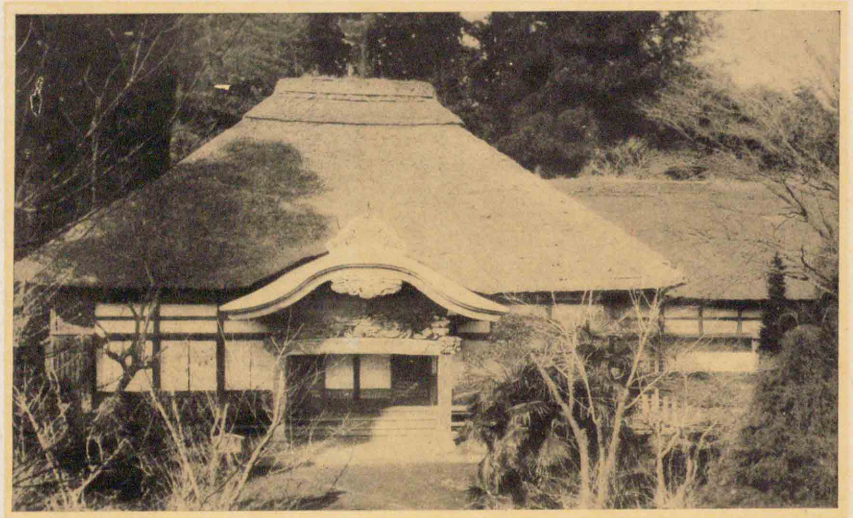
それでも名古屋は、まだ何處となくおつとりして居る。わるく云へば、本氣になつて居ないやうな氣がする。大阪は違ふ。大阪の町筋は、どこへ行つても人がうよ〳〵と歩いて居る。みな邉々として忙しげに歩いて居る。そこを縱横に縫つて、タクシイが燕の群のやうに飛びまはる。電車が注ぐやうに走る。このめまぐるしさを見て、あゝ流石は大阪だな！と思ふ。

が、現代都市の特徴は、何といつても近代粧に忙しいところにある。最新式化、超最新式化が近代都市の重な特徴となつた。銀座の店頭に並べてある商品を見渡しても、不完全ながらそんな觀念が得られる。心齋橋なども、恐らくその近代化は、銀座に劣らぬであらう。けれども、さうした最新式化も、土臺には、まづそれを自然として見せるところの、文化の洗禮を受けねばならぬ。銀座は或點までこの最新式を生かす文化の根を持つて居るやうだが、心齋橋はどうであらうか。（詩と隨筆集）

四　現代生活と古典

大類　伸
（おおるい　のぶる）
東京の人、史學家、文學博士、東北帝國大學教授。

現代は餘りに目眩しい、餘りに餘裕がない。都會裡に生活する我等に取つては殊にさうである。經濟の權威の前



——國分寺の本堂と ぬの目瓦——

猫額大立錐地

國分寺
東京府（武藏）北多摩郡國分寺村にあり。

伽藍
蘭若

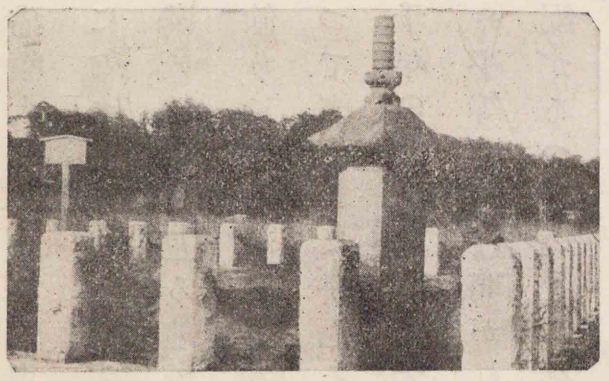
平等差別

に跪いた現代の文化は、餘りに窮屈なものとなつて了つた。猫額大の土地も利用し盡され、無住・無主の土地がないやうになつた現代から考へると、今私の眼前に展開されて居る廣袤數町に亙る地域に營まれた武藏國國分寺の大伽藍は餘りに不經濟である。無用の土木を興したとの非難も起つて來よう。併し、それは大海を知らない井蛙の見である。千年の昔、其處には大きな古典の世界があつた。縱令民主や平等の聲は聞かれなかつたとしても、或偉大な勢力の支配があつた。これを專制と罵り、一部階級の特權獨占と嘲る者があらうとも、古典の世界は確かに偉大であつた。如今經濟の觀念は民主・平等の思想と相提携して、偉大な世界

を破壊して了つた。餘裕のあつた大きな世界は、徹底的な併し窮屈な思想の爲に壓倒されて了つた。誰がそれを惜しまないであらう。

遺す
殘す

破壞
建設



國分寺址の礎石

私は決して現代を千年の昔に還さうとは思はない。併し、千年の後までも我等の前に遺された此の寺の瓦の破片、此の大きな礎石、乃至此の廣い遺址は、抑、何を私共に語つて居るだらうか。思ふに、彼等は何れも千年以前の國分寺隆盛の當時を再現してくれとは叫んでゐないだらう。否、沒落と破壞と

ニーチェ　ドイツの哲學者、一九〇〇年歿、年五十七。

千年の歳月が齎した運命とを、當然の命數だと甘んじて受けて居るだらう。只彼等は彼等を造つた千年前の人間――それは我等の祖先――を忘れてくれるなと我等に要求して居るだらう。私はそれに相違ないと思ふ。彼等は、土地と生活とに餘裕があつたと共に思想にも餘裕に富んだ古典の人々が生み出した餘裕の偉大さを示した其の文化を、尊重して居るではあるまいか。惡平等と凡庸跋扈の時代に在つては、ニーチェでなくとも超人を思はずには居られない。現代生活に取つては、古典と餘裕とは缺くことの出來ない要素である。

私は、瓦の破片の散亂した巨大な礎石の點々存在する此

の廣い國分寺の廢墟に立つて、うたゝ千年以前の人間に一層の親しさを感ぜざるを得ないのである。（歴史と自然と人）

○

國分寺の跡と聞きにし菜畑にふるき瓦を見出でつるかな

落合直文

五　百蟲譜

横井也有

横井也有（俳人、名古屋藩士、天明三年（約一四〇年前）歿、年八十二。）

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝ限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。

荘周が夢云々

さてこそ荘周が夢もこのものには託しけめ。

荘周、夢爲二胡蝶一、栩々然胡蝶也。（荘子）

古今の序云々

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。

花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。

古池にとんで翁の目覺したればりがたし。

筆蹟

ひるがほやどちらの露もまにあはず右磯清水を以書羅隱

こそ…なれ

蟬はたゝ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日さかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば、初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。

横井也有の肖像及筆蹟

やがて死ぬ

やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。（芭蕉）

「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものゝ上は翁の一句に盡きたりといふべし。

貧の學者
晉車胤家貧不常得油夏月則練囊盛數千螢火以照書以夜繼日。（晉書）

螢はたぐふべきものもなく景物の最上なるべし。水にとびかひ草にすだく。五月の闇は只このものゝ爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へられて油火のかはりにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

茅蜩（ヒグラシ）は多きもやかましからす。暑さは晝の梢に過ぎて夕べは草に露おく頃ならん。つく〳〵ぼふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。」と世の諺にいへりけり。哀は蜀魂（オーロラス）の雲に叫ぶにも劣るべからず。

槐安の都
淳于棼、醉夢入二大槐安國一。見レ王。王曰、吾南柯郡屈レ卿爲レ守。凡二十載。使者送出レ穴。遂寤。尋二古槐下蟻穴乃槐安國。又一穴直上二南枝一。卽南柯郡也。（異聞集）

蓼食ふ蟲
蓼食ふ蟲もすきく。（俚諺）

千丈の堤
千丈隄以二蟻之穴一潰。（韓非子）

蟷螂の斧
欲下以二蟷螂之斧一禦中隧車之上。（文選）

原
靜岡縣原町。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣（カゲロウ）ははかなき例に引かれ、蓼（タデ）食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黃金蟲は賤し。

蟻は明暮に忙しく世の營みに隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

蟷螂の瘦せたるも、斧をもちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕

籠にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならん。

毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一在所に二人の八兵衞ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

吉原　同縣富士郡吉原町。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく殘りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかり

竹林の七賢　嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎。（晉書）

けん。（鶉衣）

偃鼠河に飲む　鷦鷯巢レ林不レ過二一枝一、偃鼠飲レ河不レ過二滿腹一（莊子）

偃鼠河に飲めど腹に滿たすに過ぎず、汝何ぞ我が肉池を飲みほして、我が印石をして顏色なからしむるや。夜も明けなば猫にはめなんか、日が暮れなばおとしに掛けんか。地獄おとしか極樂おとしか。

漢の張湯　張湯、幼時、肉を盜みたる鼠を捕へ其の罪を劾し之を磔せしこと、史記に見ゆ。

罪の輕重をますおとしに量らば、漢の張湯が例なきにしもあらねど、若し白鼠と內緣あらば、大黑殿の思召も如何と思ひて、石見銀山一等を許し、鼠衣を剝ぎ、鼠算の過料をとり、壁の穴々、桁の隅々、殘らず追放するものなり。

西寺の老鼠　西寺の老鼠、わか鼠、御裳つんづ、裂裝つんづ、法師に申さん、師に申せ。（催馬樂、老鼠）

此の趣を西寺の老鼠より、若草のはつか鼠に至るまで、よくよく申し聞かすべきものなり。

紫の　子曰、惡二紫之奪レ朱也。（論語）

紫の外に憎きはにくいれの
朱を奪へるねずみいろかな（鼠を責むる詞——四方赤良）

六　詩二篇

亂雲落日

尾崎喜八

今太陽が沈むところで、
西の空は眞紅と金と紫との雲の荒海だ。
あの幾十里といふ廣袤を貫いて、
かなりの風が荒れ狂つてゐるらしい。
燃えかゞやいた巨大な雲が、
どれもこれも猛烈に渦巻いてゐる。
炭塊のやうに眞黑な雲、
飛沫を揚げて鬣のやうに靡いてゐる雲、
逆おとしに巻き落して燦々と碎ける雲。

濃密な、息もつまるばかりの層になつて、
壓迫的にのしかゝる上の方の雲。
一つとして弱いものはない。
優しいのや、にこ〳〵したのは一つもない。
腕つぷしの強い、えりぬきの荒くれたやつが、
筋骨をぶつ附け合つて搭闘してゐる。
まるで最も兇猛な敵と敵との肉彈戰だ。
あゝその中で爛々と輝く巨大な太陽。
瞬一つしないで、この恐ろしい亂闘に君臨してゐる太陽。
あゝ、威風に滿ちて堂々と西方の半球へ沈んでゆく莊嚴な
落日。

尾崎喜八
東京市の人、詩人。

福田正夫（神奈川縣の人、詩人。）

月かゝりて空に　　福田正夫

月かゝりて空にある時、
砂を踏みながら歸つて行く漁夫の群、
渚に光碎け、光碎け
波の音乱えて、濁聲に語る彼等とコーラスをつくる。

かゝる一瞬！
おゝ、かゝる一瞬ありて海に住む者は幸福だ。

山路愛山（名は彌吉、評論家、大正六年歿、年五十四）

七　旅行論

山路愛山

風水相擊ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我が中に住むべし。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は、自然の光景に觸れて始めて感興を湧出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠ぜし人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道にはあらず。自然は唯質問を發する者にのみ答辯を與へ、來り見る者にのみ教訓を授く。

秋風白河の關（都をぞ霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。（能因法師））

試みに千山萬水を跋渉し、而して後首を回して故郷を見よ、如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より爛熟したる某山・某水は、始めて遙かなる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくして飛ぶ雲も、夕日も、波濤も、人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天とし云へば、大に詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して、自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり、今朝杖底の千岩は卽ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず、

聯想
連想

過去―宿世
現在―現世
未來―來世

身を轉じ甕外に在りて始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。嘗て我は蜻蛉を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき、溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇とを異にせる我は、始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。

客觀的
主觀的

嘗て我を圍みて而も我に何の感興も與へざりし自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て、最も味あるものに非ずや。

畫屏
畫餅

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時、夏の初ならば杜鵑花・霧島紅の雨を降らし、時、秋ならば兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景、人をして知らず覺えず自然の吸引する所とならしむ。さては放翁の歌へる如く、「山重水複疑無道、柳暗花明又一村」前面に鬱々たる山あり、舵師棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し。忽ちにして山廻り天濶く鷄犬聲あり、田畝開け、桃源一村、人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情、果して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く眠るが如く、有るが如く、無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に沒風流の徒といへども、終に黄金以外眞の娯樂あることを知るに至るべきなり。

放翁
南宋の詩人陸遊の號。この詩は「遊山西村」と題するもの。

桃源一村
武陵桃源は假想の理想鄕、晉の陶淵明に、桃花源記あり。

沒風流
沒分曉

或は又朝まだきに旅立すれば、駒の歩みに連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙も後へに靡き、清爽の氣身を襲ふ、殘月彼方の山の端に懸り、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗とが地歩を爭ふが如き、又微雨の蕭々たるに歷史ある古寺を訪へば、蝸牛壁

蕭々
肅々

に紋を畫きて、自ら多年風雨の侵蝕を示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、これ皆旅行に非ずんば得べからざる底のものに非ずや。蕪村嘗て句あり。

羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

一面の平湖鏡のごとき浮島ケ原、其の南を縫へる松林の東海道總べて是一幅の畫圖なり。而して春天穩かにして「富士おろし」吹かず、空氣は漣波だも動かざる水に似たり。忽ち羽蟻の飛ぶあり、靜中纔かに動あり。駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此の如き春景、豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖つきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數個の山脈は蛇の如く邑を圍み州を隔てて、營々たる人間恰も蟻垤の如く見ゆるのみ

蕪村　姓は谷口、一に與謝といふ。天明調代表の俳人。

浮島ケ原　靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾野。

ならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりといへども、悟了すれば浮動の原素に過ぎず。アトムとアトムと相擊ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の狀態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザルは生れて死にたり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の「山川與二城郭一漠々同一形、市人與二鴉鵲一浩々同一聲。」といへるものは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは、卽ち哲學の講壇に坐するものなり。

人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。人は無限の中に孕まれたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠にやすらひて、身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國

アトム　Atom.

劉は起り　漢の劉邦沛より起り、天下を併はす。楚の項羽、劉邦の爲に垓下に敗らる。

シーザル　羅馬の政治家、嘗て文武の大權を握りしが、後反對黨の刺殺する所となる。

東坡　宋代の文豪、名は軾、此の詩は、眞興寺閣と題するもの。

雲雀よりも　雲雀より上にやすらふ峠かな。（芭蕉）

あり、遙かなる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ空ひとつに見ゆる越の海の

涙をわけてもかへる雁がね

自然の家には住むべき舍多きかな、人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。此の意義に於て、自然は人をして無限ならしむ。これ旅行より學び得たる自然の教訓にあらずや。（愛山文集）

みよしの山のあなたに宿もがな身のうき時のかくれがにせん。（藤原宗長）

天つ空

源三位頼政の歌。

荻原井泉水

名は藤吉、東京の人、俳人。

芭蕉

松尾氏、名は宗房、伊賀の人、正風の祖、元禄七年（約二三〇年前）大阪に歿、年五十一。

八　芭蕉の生活とその俳句

荻原井泉水

芭蕉の俳句を見ると、その生活がそつくり其儘出てゐるものが多い。即ち俳句といふ彼の藝術が、彼の自然禮讃の生活とぴつたり合致して隙がない。これは俳句といふものの上で、いや日本の詩といふものの上で芭蕉によつて發見された尊い眞理である。芭蕉以前の俳句は、一つの作爲、もしくは機智であつて、面白さうな事を考へ、面白さうに言ひこなせばよいとされてゐた。作者自身の生活から句作するなどといふことは、思ひもよらなかつたのである。さうした際に、俳句は、詩は、作者の實感から出發せねばならぬ、作者の生活から產み出されねばならぬ、といふことを實證した芭蕉は、えらいと謂はねばならぬ。

松尾芭蕉

芭蕉が深川六間堀の小さな草庵に隱栖して、獨り心の中に新しい詩の芽を育んでゐた頃の作、

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

庭には數株の芭蕉が植ゑてあつたので、「芭蕉庵」と稱し、「芭蕉」といふ名もこれから得たといふその草庵は、屋根も傷んで野分の雨が洩

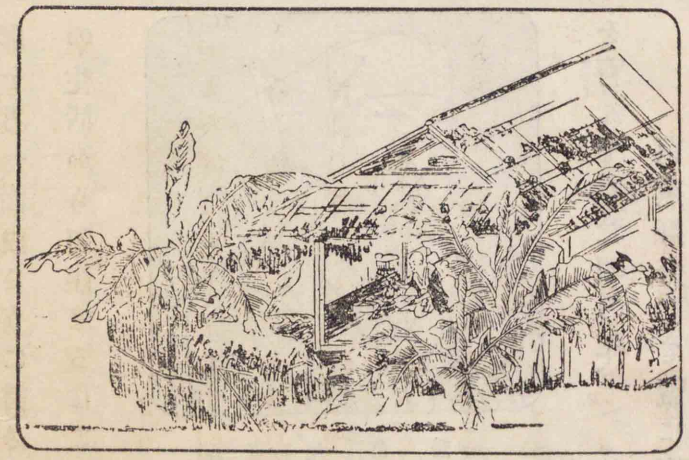
深川六間堀

江戸。今の深川區六間堀町。

るので、盥を出して雨うけしてゐる佗しい有樣が、目に浮んで來る。

秋風がすさまじい勢を以て軒先に迫つて來る、一たまりもなく破れてしまふ芭蕉の傷み易い葉の揉まれる音、ばら〳〵と散彈を擊つやうな大粒の雨、その雨が、じや〳〵と盥に落ちる音も聞えるやうだ。部屋の中にぢつと耳をすまして大地の音を聽いてゐるやうな作者の、寂しい、澄んだ、わびしい心持を中心として、秋の寂しい自然が、この俳句に生きてゐる。

芭蕉庵の近くには、彼の門弟の曾良が住んでゐて、朝夕薪水の勞を扶



芭蕉庵

曾良　河合氏、信濃の人、芭蕉の門人。

けてゐた。或日雪の降る中に、いつもの如く曾良は芭蕉を訪ねて來た。懶い芭蕉は爐に火の消えたのも其儘にしてゐた。

君火たけよきものの見せん雪まろげ

「雪まろげ」は雪を丸めて何かの形に造つたものである。二人の親しさ、それは子供のやうな純情が、この俳句に泌み出てゐる。

曾良の外にも、芭蕉の門人達は、をり〳〵訪ねて來ては庵を賑はした。しかし、芭蕉は夜も更けて、獨り自分の影法師より外に人の形のない部屋に、ものを考へてゐる時などは、流石に寂しかつた。

酒のめばいとゞ寢られぬ夜の雪

芭蕉の人間的な感情がよく出てゐる。門人其角が餘り大酒をするので、その健康を氣遣つた餘り、「飲酒一枚起請」の文を寫し、

朝がほに我は飯くふ男かな

の句を添へて、其角の許に送つた事もあつた。大酒をする人として、

純情
純眞

其角　榎本氏、江戸の人、芭蕉の門人。

世の中が寂しいから盃を手にするのであらう。併し芭蕉は靜かに醒めて、その寂しさをぢつと見据ゑてゐる人であつた。世の人人が生きる爲にと競ひ立つて、あわたゞしく馳せ競べする樣に一生を過すのとは違つて「時」といふものが人生を浮べて、悠久から悠久に流れてゆく姿を、ぢつと見すゑてゐる人であつた。

暮おそき四谷すぎけり紙草履

四谷　江戸の四谷。今の東京市四谷區。

さうした靜觀の眼は、殊に自然の風物に向けられた。多くの人が無感興に見て過ぎてしまふやうな路傍の雜草でも、それを凝視してゐれば、その中に自然の大きな生命が全體的に輝いてゐることを彼は知つた。

よく見れば薺花さく垣根かな

作者のやはらかい感情が「おゝ此處に」と、かよわい薺を抱きかゝへるやうである。そして可憐な薺の鄙びた姿が、芭蕉に微笑みかけてゐるやうである。これは薺を歌つた句だが、それがそのまゝ芭蕉自身の生活を歌つた事になつてゐる。

筆蹟　ふる池や蛙飛こむ水の音　はせを

草庵　山庵

芭蕉の名を知る者は誰も知つてゐるほど人の口に傳へられてゐる古池の句、この句でも芭蕉の生活を背景にしてその味ひが生きてくる。何となく惱ましさを覺えるやうな一日、草庵の邊には物音といふものが聞えない。總べての物が、その古池の水のやうに淀んで湛ひてゐる中に、その靜寂を破つて、作者は確かに一つの音を聞いた。それは蛙が水に飛込んだといふ些細な地上の一事實だが、この一つの音にも汎有的な生命のぬきさしならぬ自然味を感じたのである。地上の總べての物に悉く神の意志が現れて

ゐる不思議さを、芭蕉は證悟したのである。作者の心持――或大自然の暗示に觸れたやうな一刹那の緊張した心持、その心持を愛惜して、自然の懷につゝましく生きてゐようとする作者の禮讃的な生活――が出てゐるといへよう。

禮讃
讃美

名月や門にさしくる潮がしら

この「門」は人の家の門ともとれようが、やはり芭蕉庵のさゝやかな門口と見なければ生きて來ない。芭蕉庵は深川の小名木川の邊にあつたので、滿潮の時は草庵近く水があげて來たのである。「名月や」といふ詠歎的な言葉は、月の高い無邊際の天空に目を放ちやつた氣持で、その氣持が、廣々とした潮のゆらめきにとけきつて、又ひた〳〵と自分の胸に歸つてくる感情の波動が、「門にさしくる潮がしら」と結んだ短い言葉のリズムに表現されてゐる。この句に描かれてゐるものは、月夜の佳景ではない、月に清められてゐる

作者の清々しい生活そのものである。

上に「芭蕉の生活」といつたが、この言葉は內面的の生活、卽ち心の生活といふ意味である。芭蕉は「佳い生活」、卽ち心の平和な、感謝に充ちた生活をしようと考へた人である。外面的に、物質的に佳い生活をしようと思つたのではない。かやうな物質的生活に對しては、彼は全く意欲を棄ててゐた。自ら金を得ようとせず、たゞ弟子たちの報謝するところに依つて、貧しく生きてゐられれば結構だとした。深川の庵室も一門人から提供してもらつたのであるし、日々の米や鹽も門人の喜捨に任してあつたのである。芭蕉はさうしてこそ、人は本當に自然の愛を感じ、また人間の愛を感じて生きることができると思つた。生存競爭といふ唾み合ひもなく、常に合掌してゐるやうな有難い心持で生きてゐられると思つた。さうしてこの愛と感謝とに充ちた一念が、物に觸れて表現される

得よう

所に、彼の詩、卽ち彼の俳句が生まれたのである。

陽炎の我が肩にたつ紙衣かな

自分といふものを自然の光明の中に置いて、その光明をしみじみと暖く心の中に感受してゐる心持が生きてゐるではないか。

心境

かやうな專念的な、中核的な心持を表現するには、極めて單純な、原始的な、簡素な、而も凝聚的な强い響を持つた言葉でなければならない。そこに芭蕉は「俳句」といふ十七字の詩形を見出したのである。

境地

されば芭蕉は、自分の生活を以て、俳句といふ藝術を活かしたのである。また俳句といふ藝術が、かやうな生活の心境を歌ふ爲に二つなきものであつたのである。芭蕉の生活とその俳句とは、ぴつたりと一つに合つてゐて、その間に少しの隙もないのである。

（古人を說く）

月日は天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。（李白、春夜宴桃李園序）

去年元祿元年。

白河の關福島縣白河郡古關村大字旗宿にあり。奥州の關門。

九　奥の細道

松尾芭蕉

一　首途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を泛べ、馬の口捉へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年より片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて取る物手につかず、股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、

杉風　鯉屋藤左衞門、翁の門人、別墅は江戸深川六間堀にあり。

千住　東京府南足立郡、東京の東北口。

元祿二年　時に芭蕉四十六歳。

杉風が別墅に移る。

草の戸も住み替る代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野・谷中の花の梢またいつかはと心細し。睦じき限は宵より集ひて、船に乘りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の眼は涙

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ち

草加　武藏國北足立郡、奥州街道にあたる。

いかで都へ　たよりあらばいかで都へつげやらん、今日白河の關は越えぬと。（平兼盛）

秋風を　能因法師の「都たゞ」の歌。

紅葉を　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の關。（源頼政）

卯の花の　見て過ぐる人しなければ卯の花の咲ける柯根や白河の關。（藤原季通）

て、吳天に白髮の恨を重ぬと雖も、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと定めなき頼の末をかけ、其の日漸く草加といふ宿に辿り着きにけり。痩骨の肩に懸れるもの先づ身を苦しむ。唯身すがらにと出立てるを、紙衣一具は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆の類、あるはさり難き餞などしたるは流石に打捨て難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

二　白河の關

心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便求めしも理なり。中にも此の關は風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲き

清輔　藤原清輔、二條天皇の御代の歌人。（その著「袋草紙」の記事を指す。）

扶桑　日本國の異稱。

洞庭　支那湖南省の北にある大湖。

西湖　支那浙江省にある湖。

浙江　支那浙江省東北部の灣、一名錢塘江、海潮の奇を以て知らる。

大山祇　山を司る神。

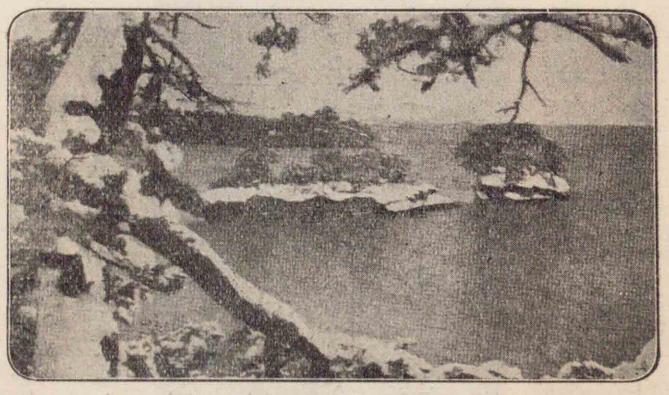
そひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

三　松島

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑濃かに、枝葉汐風に吹き撓められて、屈曲自らの撓めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工いづれの人か筆を揮ひ詞を盡さん。

雲居　元和頃の名僧、仙臺侯迎へて松島瑞巖寺に居らしむ。

平泉　岩手縣西盤井郡平泉村。



雪の松島（雄島）

四　平泉

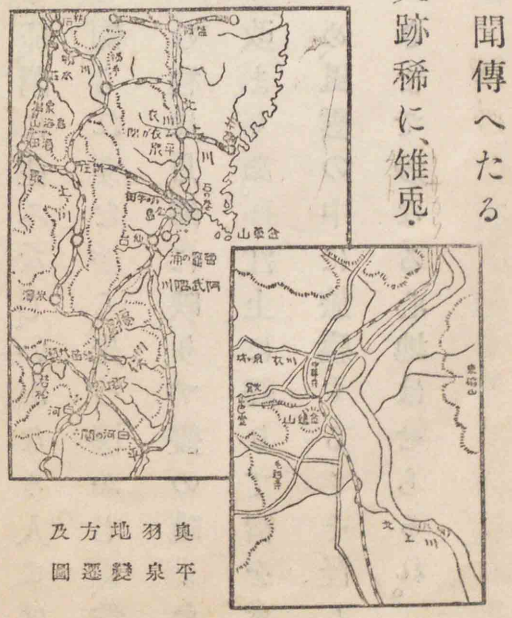
雄島が磯は地續きにて、海に出でたる山なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穗松笠など打煙りたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷かしく、佇む程に月海に映りて、晝の眺また改まりぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寢するこそ怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

十二日平泉へと志す。聞傳へたる姉歯の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兎・芻蕘の往きかふ道そこともわかず。終に道ふみ違へて、石の巻といふ湊に出づ。「黄金花咲く」と詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、竈の煙立ち續きたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人もなし。漸くまどしき小家に一夜を明かして、明くれば又知らぬ道迷ひゆく。

石の巻　宮城縣牡鹿郡。

黄金花咲く　すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがねの花さく（大伴家持）

金華山　宮城縣牡鹿半島の極端、海中に屹立する島。



奥羽地方及平泉襲撃圖

長沼　宮城縣登米郡新田村。

戸伊摩　同郡登米町。

三代　藤原清衡、基衡、秀衡。

秀衡が跡　平泉館址。

金鶏山　秀衡の作れる平泉鎮護の山、富士山に擬し雌雄の金雞を山上に埋む。

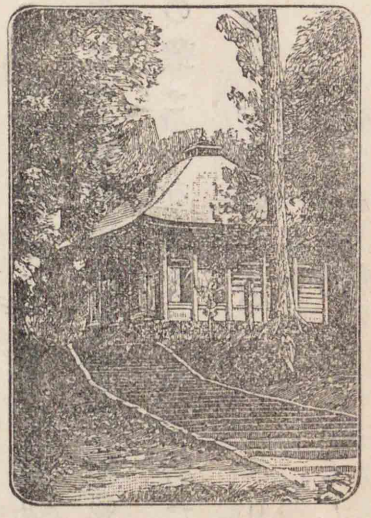
高館　衣川館、義經の居館。

泉が城　泉三郎忠衡の居館。

國破れて　國破山河在。城春草木深。（杜甫、春望詩）

心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間廿餘里ほどに覺ゆ。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣選つて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして



中尊寺金色堂

經堂　藤原清衡建立。建武四年修理す。

光堂　金色堂、藤原清衡建立。覆堂は惟康將軍の建立。

三尊　阿彌陀如來、觀世音菩薩、勢至菩薩。

七寶　金・銀・瑠璃・車渠・瑪瑙・眞珠・琥珀。

兼好法師　吉田兼好、室町時代の僧、歌文に名あり。「徒然草」は其の隨筆集。

草青みたり。」と笠打敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢、空虛の叢となるべきを、四面新たに圍ひ、甍を覆うて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂　（奥の細道）

「いづくにてもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目覺むるこゝちすれ。」と徒然草の中で兼好法師が云つてゐるやうに、旅行といふものは、不思議に私達の心持を新鮮にするものである。平生何心なく看過してゐるやうな事でも、旅では妙に私達の心を動かす。一寸した手紙一本書くにしても、旅に出てゐる場合には、それが大層意味深いことのやうに感じられたりする。旅行は何事につけても私達の心を注意深くならせ、感じ方を鋭敏にならせる。

愛山の「旅行論」　第七課にあり。

旅は一方に於て、私達にあらゆるものから投出されたやうな孤獨感を與へると同時に、他方に於てあらゆるものを懷かしませ、あらゆるものを新鮮に感じさせる。かうした意味に於て、故人山路愛山の旅行論の如きは、誠に味ひ深い言葉である。更にかの全生涯を漂泊の旅で送つた芭蕉の如きは、どんなに深く自然と人生との味を味ひ得たことであらうかと、そゞろに崇敬の念に打たれる次第である。

芭蕉自らも何かの中に、「旅の心」を知ると云ふことを、人間らしい人間としての一つの貴い要素である如く書いてゐたやうに

記憶するけれども、芭蕉などのかうした境界を思ひ合せると、私達の旅の經驗などは「旅」といふ言葉を以て呼ぶことすら、一種の冒瀆であるやうにさへ感じられるのである。

それにしても、流石に旅の思出は懷かしい。住馴れた土地で平生見慣れてゐるやうな事でも、旅で見て深く感じた事柄は、いつまでもいつまでも、忘れることが出來ない。自分の家の庭に咲く花でも、寂しい旅の夕暮などに見ると、たまらなく懷かしく感じられて、その印象は永く心から消え失せないでゐる。田や畑で働いてゐる人の姿なども、旅で眺めると何となく特別な懷かしさを覺えるものである。

嘗て私は秋の夕暮、ある山中の村の小さな一つ家の前に、八九歳ばかりのと五六歳ばかりのと二人の子供が、野へ働きに行つて居る兩親の歸りを待ちわびて、泣きわめいてゐるのを見て、たまらない憐れさに打たれたことがあつた。日はもう山蔭に沈んで、冷たい夕暮の薄闇があたりを蔽ひかけてゐた。いかに住馴れた自分の家だとはいへ、山奥の夕暮は流石に淋しい。さうした留守居は春秋の農繁期には、彼等の毎日しなくてはならぬ事であるにしても、やはり夕暮になると、彼等には毎日新たな淋しさが感じられるに違ない。

「何といふあはれさだらう！」　さう思ひながら、私は涙ぐましい思で彼等に近寄つて、何かといだはつてやらうとした。私の心は、その瞬間、その二人の子供に對する同情で一杯になつてゐた。そんなに遲くなつてゐたのに、自分の宿るべき村には、まだそこから小一里もあつたのだが、そんな事は、その場合私の念頭から去つてゐた。

しかし私の豫期は全くはづれた。それほどしみ〴〵としした

心で私が近づいて行つたに拘らず、二人の子供は見なれない私の姿を見るや否や、あわてて二人とも、まだ燈のともらない眞暗な家の中へ逃げ込んでしまつたのであつた。私は全くあつけにとられてしまつた。胸の中から、何もかも、すつかり奪ひ去られたやうな氣持で、私はたゞ茫然として、その暗い家の前に立つて居るより外に仕樣がなかつた。

が、暫くして我に返つた私は、何心なく幼いものの心に、時ならぬ愕きと怖れとを與へたことを悔いつゝ、そこを立ち出でて、重たい心持で、自分の行くべき道を獨とぼ〳〵と辿つた。

さうかと云つて、あの場合、二人の泣き叫ぶ子供に、言葉一つかけずに通り過ぎてしまふやうなことは、私には到底出來ないことであつた。私には結果の如何を考へる餘裕などは、あの場合なかつたのである。しかも、私の此の經驗は、後になつて芭蕉の

野ざらし紀行　芭蕉が貞享元年（時に四十一歳）江戸を出で東海近畿を吟行せし時の俳句を主とせる旅行記。

相馬御風　名は昌治、新潟縣の人、文學者。

「野ざらし紀行」の中の次の如き一節を思ひ合はさせずに措かなかつた。

富士川の邊に三つばかりなる捨子の哀れげに泣くあり。此の川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命待つ間と捨置きけん。小萩がもとの秋の風、今宵やちるらん、明日やしをれんと、袂より喰もの投げて通るに、

猿を聞く人すて子に秋の風いかに

いかにぞや、汝父に憎まれたるか、母にうとまれたるか、父は汝を惡むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只これ天にして、汝が性のつたなきを泣け。

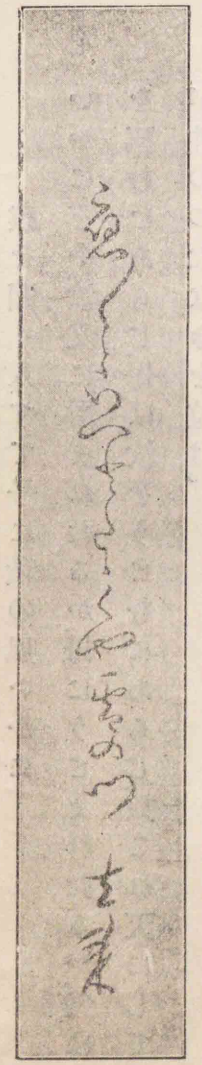
かうした芭蕉の心持の深さも、あの經驗を俟つて、始めて幾らか分る樣な氣がする。だが、その樣な事にいつ迄も〳〵心を惹かれるのも、それが旅での出來事であつたればこそである。

（涙ぐましい旅の心――相馬御風）

嵐雪　服部氏。淡路の人。
去來　向井氏。肥後の人。
應々といへとたゝくや雪の門　去來
丈草　内藤氏。尾張の人。
夜も既に明て水鶏の行衛哉　其角

一〇　蕉風

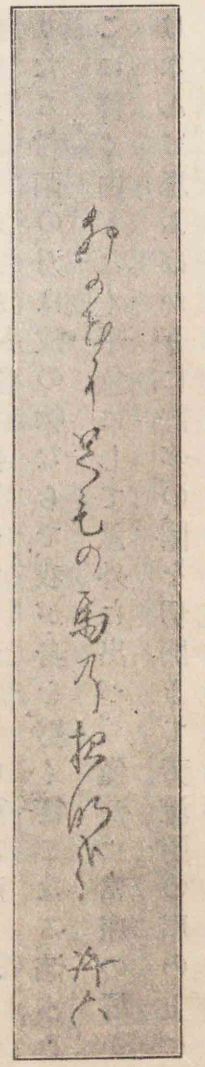
梅一輪一りんほどのあたゝかさ　嵐雪
なにごとぞ花見る人のながカ　去來



子規鳴くや湖水のさゝにごり　丈草
五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉
名月やたゝみの上に松のかげ　其角

涼菟　岩田氏。伊勢の人。
越人　越智氏。熊本の人。
許六　森川氏。彦根の人。
卯の花に足毛の馬の夜明かな　許六
支考　各務氏。美濃の人。
惟然　廣瀬氏。美濃の人。
瀧澤馬琴　名は解、曲亭馬琴と號す、德川末期の小說家、嘉永元年（約八〇年前）歿、年八十二。
禍福云々　禍福如二糾纆一（史記）

兩の手に美濃と近江や鳴子ひき　涼菟
山寺に米つくほどの月夜かな　越人
きりぐす鳴くや夜寒の芋俵　許六



叱られて次の間に立つ寒さかな　支考
水鳥や向うの岸へつういつい　惟然

一一　「芳流閣」とその批評

瀧澤馬琴　大町桂月

古の人謂はずや「禍福は糾へる繩の如し。」と。人間萬事往くとし

塞翁が馬　淮南子に見えたる故事、熙晦機の詩の句に「人間萬事塞翁馬。」

福の倚る所　禍兮福所レ伏、福兮禍所レ伏、孰知二其極一（老子）

滸我　足利成氏の居城、茨城縣（下總）猿島郡。今の古河町。

芳流閣　滸我城中の三層樓。

瀧澤馬琴

て塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり、とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心にしめつ身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てければ、遙々滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりつる、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刀は故の物ならで、我が身を劈く讐となる、憾みをこに釋く由もなく、事急にして意外に出づ。僅かに當座の辱を避けなんと思ふばかりに許多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れどもとにかくに、脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を極めたる、心の中は如何ならん、思ひ遣るだにいと痛まし。」

信乃は折角村雨の名刀を獻ずるの機を得て、福を得んとせしに、一二日前、すりかへられしことを知らざりしかば、忽ち身を殺されんとするの禍を釀すに至れり。その福は禍と、ふりかはりたる村雨の二三句、例の懸詞ながら、前節を承けて、妙言ふべからず。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀。「犬塚信乃を搦めよ」とて慾に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。」

信乃は福が禍となり、見八は禍が福となる。冒頭の一節、是に於て益、切なり。月來の二三句妙甚だし。馬琴の懸詞には無理なるもの、下らぬもの多けれども、君命重くいや高きの懸詞は、覺えず讀者をして聳動せしむ。

その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も

阪東太郎　利根川。

にらまへ　にらむ

乾蒸の燄熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔滔たる、こゝ生死の海に朝る、流は名に負ふ阪東太郎、水際の小舟かぢを絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれ繫ぎとめんと、鰓の樹傳ふ如くさら〳〵と、登りはてたる三層の、屋根には、まぶしさすよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへ合うて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巣を巨蛇の狙ふに似たりけり。

名たゝる阪東太郎の河畔、三層樓の屋上に、勇士と勇士と相闘はんとす。その雄壯なる事、歴史にも、小説にも、幾んど比を見ず。而して椽大の筆、よく此の雄壯なるさまを記し得る小説家は、明治以前、馬琴を措いて、また誰れにか求むべき。聞くならく、馬琴、八犬傳を逐次世に公にし來りしに、この芳流閣の搭闘出づるに及びて、忽ち非常なる喝采を博し世にもてはやさるゝに至れりと。阪東太郎は伏線その一なり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せる床几に尻を打掛けて、勝負如何にと見上げたり。芳流閣の東西には腹卷したる許多の士卒、槍長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突つ立て、組んで落ちなば擊ちとめんとて項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は、連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け力衰へず、能く見八に捷ち得とも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならずも網に入りぬ、獣ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば、縡みな休まん、脱れ果てじと見えたりけり。」

墨氏・魯般　墨氏は墨翟、支那周代の思想家、魯般は同時の公輸般をいふ、般曾てを楚の謀臣となり、雲梯をと造りて宋城を攻むる、翟時に宋城を守りて飛鳶を造りて之を防ぐ。

二勇士を對峙せしめたるも、直ちにその搭闘を描かず。忙裡閑をぬすんで、樓下の様をうつし、到底信乃の逃るべからざるを狀す。これ一層讀者を刺激する筆法なり。河水云々、伏線その二なり。

その時、信乃思ふやう、「初層・二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を、斫りおとしつる後は絶えて近づく者なきに、今唯ひとり

膳臣巴提便　欽明天皇七年百濟に使し、虎穴に入りて虎を刺殺す。

富田三郎　和田義盛の士、源實朝の面前にて長さ二尺方七寸の大鹿角二箇を一度に折る。

よき敵（こそ）ござんなれ

萬夫不當
一騎當千

擬議躊躇逡巡

登りきぬるは、よに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂く力あるか。遮莫一箇の敵なり、引組んで刺しちがへ死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せん。」と血刀を袴の稜もて推し拭ひ、高瀬の如き方桿に立つたるまゝに寄するを俟つ。

既に信乃の身の危きを、外部より觀察せり。こゝには更に信乃の心理を描出せり。而して外部の觀察とは違ひ、案外に、よき敵を得たりと喜べり。勇士の心中、讀者をして心自ら壯ならしむ。

見八も亦思ふやう、「かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中より此の役儀に擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも、擊たるとも、勝負を一時に決せんものを。」と思ひにければ、ちつとも擬議せず。既に信乃の心中をうつせり。こゝにまた見八の心中をうつさざるを得ず。信乃も見八も、共にいさみにいさめり。共にこれ絶代の勇士。知らず、勝敗如何にか決すべき。愈、これより搭闘はじまらんとす。筆路堂々として逼らず。手腕の大なる者と謂ふべし。

一上一下
虛々實々

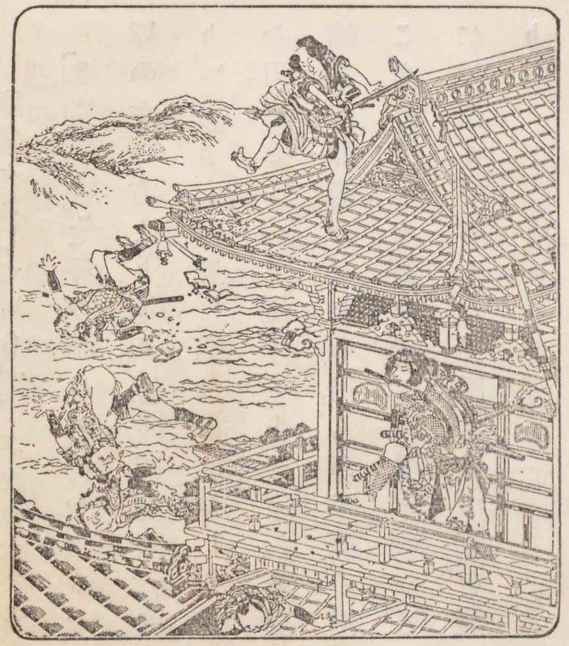
「御諚ざふ。」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桿の左の方より進み登りて、組まんとすれど寄せ附けず。「心得たり。」と鋭き太刀風に、擊つをはつしと受留めて、拂へば透かさず切込む刀尖、さゝへて流す一上一下、辷る螢を蹈みとめて、しきりに進む捕手の祕術、あなたも劣らぬ手練の働き、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虛々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて見る目もいとゞ遙かなり。」

こゝに至りて、愈、搭闘を記す。而して全く記し終らずして、之を見物する成氏主從の上に及ぶ。縱横自在にして、痒き處に手のとゞく概あ

未曾有
曠世

り。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲。兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るもかくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を爭ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまでに切裂かれ



芳流閣上の搭鬪

覆車
覆轍
覆載

しかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて撓まず去らず、疊みかけて擊つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて、鐺と打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が刃は鍔際より、折れて遙かに飛び失せつ。

搭鬪いよ〳〵佳境に及ぶ。事既に壯絶、筆勢また飛躍す。見八は捕手の役なれば、こゝに至るまでなほ刀を拔かず、信乃は百戰なほ餘勇、かなしや刀折れたり。記し來りて、殺氣紙面に迸り、讀者に冷汗をにぎらしむ。

見八得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引着けて迭に利腕しかと取り、捩倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈辷らして、河邊の方へころ〳〵と、身を輾ばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる甃の勢、

止るべくもあらざめれど、迭に取つたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、打累りつゝ、撑と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の、直中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

（南總里見八犬傳）

刀失せて組打せしに、思ひきや、共に舟に落ちて川下に流れ去らんとは。前に二回まで伏線あり。舟におつること唐突ならず。勝負如何にと讀者をして固唾をのましめて、忽ち行方不明に歸す。餘韻盡きず。何等の狡獪手段ぞ。

（近世名文解剖）

芥川龍之介　東京市の人、文學者。昭和二年歿。年三十七。

一二　戲作三昧

芥川龍之介

「これは初から書き直すより外はない。」馬琴は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへ突きやると、片肘突いてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎭、墓の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立――さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦しみに、久しい以前から親しんでゐる。それ等のものを見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな――彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁ずることができない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると、人並に自惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は、彼の上に、何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけにまた同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。その彼が結局、自分も彼等と同じ能力の所有者

椿說弓張月　爲朝を主人公としたる歷史小說。馬琴の傑作の一。
南柯夢　三七全傳南柯夢といふ。傳奇小說。馬琴の傑作の一。
端溪　支那廣東省の地名。よき硯石の產地。
蹲螭の文鎭　うづくまるみづちの形を摘みにつけたる文鎭。
硯屏　文房具の一。硯の先に立つる屏風形のもの。

だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことは、どうして易々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は、「さとり」と「あきらめ」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

遼東の豕　漢書朱浮傳に「遼東有レ豕、生レ子白頭。異而獻レ之、行至二河東一。見二群豕皆白一、慙レ懼還」

芥川龍之介

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戰ひ續けた。若しこの時、彼の後の襖がけたゝましく開け放されなかつたら、さうして「お祖父樣、たゞ今。」といふ聲と共に、柔かい小さな手が、彼の頭へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、いつまでも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖をあけるや否や、子供のみがもつてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父樣、たゞ今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」この語と共に「八犬傳」の著者の皺だらけな顏には、別人のやうな悅びが輝いた。

茶の間の方では、甲高(かんだか)い妻のお百の聲や、內氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、をりから悴の宗伯も歸り合はせたのらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと眞面目な顏をして、天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をするたびに動いてゐる。

「あのね、お祖父樣にね。」

栗梅の小さい紋附を着た太郎は、突然かういひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、ゑくぼが何度も消えたり出來たりする。——それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

栗梅　濃き栗色。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉强なさい。」

馬琴はこう〳〵噴きだした。が、笑の中ですぐまた語をつぎながら、

「それから。」

「それから――えゝと――癇癪を起しちやいけませんつて。」

「おや〳〵、それつきりかい。」

「まだあるの。」

「どんなことが。」

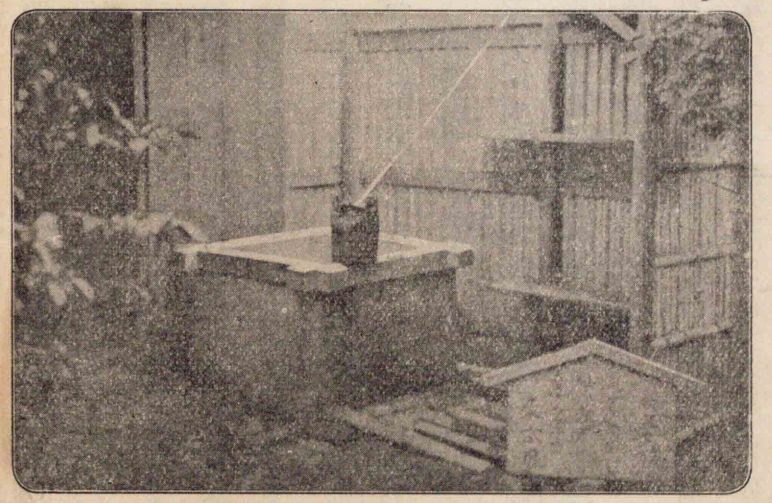
「えゝと――お祖父樣はね、今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。



瀧澤馬琴宅趾の井戸

「もつと〳〵よく辛抱なさいつて。」

「誰がそんなことを言つたのだい。」

「それはね。」太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛參に行つたのだから御寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音樣がさう言つたの。」

かういふと共に、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛びのいた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに小さい手を叩きながら、ころげるやうにして、

茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのはこの時である。彼の唇には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に彼の目には、いつか涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或はまた母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「觀音樣がさういつたのか。——勉强しろ。癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へははいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、こほろぎの聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

初め筆を下した時、彼の頭の中には、微かな光のやうなものが動いてゐた。

が、十行二十行と筆が進むに隨つて、その光のやうなものは、次第に大きさを增してくる。經驗上その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意して、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐにまた消えてしまふ。

「あせるな。さうして出來るだけ深く考へろ。」

馬琴は動もすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分にさゝやいた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押遣つてしまふ。

彼の耳にはいつかこほろぎの聲が聞えなくなつた。彼の目にも、圓行燈の微かな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上をすべりはじめる。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゞけた。

頭の中の流は、ちやうど空を走る銀河のやうに、滾々としてどこからか溢れてくる。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分

に呼びかけた。

「根かぎり書きつゞけろ。今己が書いてゐることは、今ででもなければ書けないことかも知れないぞ。」

しかし、光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。反つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つてくる。彼は終に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのはたゞ不可思議な悅びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戲作三昧の心境が味到されよう。どうして戲作者の嚴かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑛石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。

（現代小說全集）

荷田春滿
山城稻荷社の祠官、國學者、元文元年（約二〇〇年前）歿、年六十九。

賀茂眞淵
濱松の人、國學者、明和六年（約一六〇年前）歿、年七十三。

筆蹟
渡の原豐受登る朝日子の御影かしこき六月の空　眞淵

一三　たけり猪

ますらをや折にふれてはたけり猪の
たけきさゝろのふしなるらむ

荷田春滿

信濃なる蕎麥畑をおぶる雲の
つゞきそたわに咲くあゝかな

賀茂眞淵

本居宣長
三重縣松坂の人、國學者、享和元年（約一三〇年前）歿、年七十二。

きゝ出づるたれはの声の光より
こゆるもろこゑを聞くをしむ

加藤千蔭
江戸の人、芳宵園と號す、國學者、文化五年（約一二〇年前）歿、年七十四。

保田川のきそくぐすいのだゝふ
かすむあしみ雨をうそしれ

村田春海
文化八年（約一二〇年前）歿、年六十六。

たちのぐる谷はうき雲みなこえて
柳原のたくふむらさめぞぬる

小澤蘆庵
名は支中、張に生る、國學者、享和元年（約一二〇年前）歿、年七十九。

栗もゑみ柿をいろづきなるぬられ
ほたらしげなるときはふる人

良寛和尚
越後の人、歌を善くす、天保二年（約九〇年前）歿、年七十四。

人のなさむが苦しきをと問ふなくば
人をへだつるまろとたへよ

香川景樹
鳥取の人、歌人、桂園と號す、天保十四年（約八〇年前）歿、年七十六。

四月の新たちくるくちして
秋ゆくそでにたまるゆきのれ

筆蹟
月前郭公
さやかなる月ゆゑだにもねられぬを山ほとゝぎす鳴くなりけり夜なりけり　景樹

加納諸平
遠江の人、國學者、安政四年（約七〇年前）歿、年五十二。

あゝ無はゆく一もしらぬ杉山の
うつほふこゑるぐらしれ風

橘曙覽（あけみ）
福井の人、國學者、明治元年（約六〇年前）歿、年五十七。

大隈言道
福岡の人、歌人、明治元年（約六〇年前）歿、年七十一。

筆蹟
よそよりも今や釣るかとまつものをところかへたる沖のあまぶね　言道
釣舟

八田知紀
鹿兒島の人、歌人、明治六年歿、年七十五。

太田垣蓮月
彦根の人、明治八年歿、年八十五。

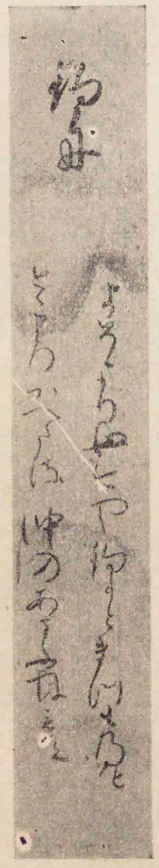
筆蹟
花のたびにありてやどかさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下ぶし　蓮月

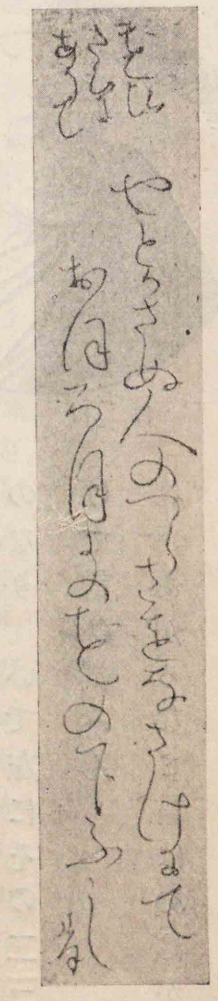
金子元臣
御歌所寄人、國文學者。

かへり来ば肺腑の但もとのぬまに
まづ新たせよまちつゝ居るぞ　橘曙覽

荒風に門田いなごの吹のれ来て
きりぎりすあたるまぢかの音のれ　大隈言道

網引する海の夜ごとを身にしめて
ゆられぬ夢やらうもうらん　八田知紀





つゆのきぬ人のつらさをなさけにて
おぼろ月夜の花のしたぶし　太田垣蓮月

一四　川柳點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷れ、近づくもの皆傷く。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺

突梯
唐突

骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚の調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左にその二三を擧げて言ひ試みん

柄井川柳

あがるなと言はぬばかりの帳を出し。

無筆者、年賀に來て、御慶帳の記名に困り、「さらば來ぬ分にして下され」といひし事、昔の笑話に見えたり。今は帳の代に名刺受を玄關に出す。是も上るなと言はぬばかりなり。

後の祭
六菖十菊

竹の子は盗まれてから番がつき

よく有ることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりぐす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渇虎」と書けるを、いみじき手柄のやうに驚きし人、若し此の句を見ば、何とかいはん。

急がずば
いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野ぢの村雨。（太田道灌）

本降になつて出てゆく雨やどり

「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考物なり。

塙檢校
塙保己一。

提燈が消えて座頭に手を引かれ
その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さて〳〵目あきは不自由な」といひしに似たり。

笑ひ難くや（あらん）

片假名に四角な文字は手を引かれ
漢文に捨假名・反點のうるさく左右に附きたる樣、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、「四角な文字に灸をする」といはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ
手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乘せたる類のこと多し。強ちに、この狸をのみ笑ひ難くや。

小野九太夫
「假名手本忠臣藏」に出づ、大野九郎兵衞に擬したる人物。

名物を食ふが無筆の旅日記
腹のふくるゝ旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く〳〵も好い方を取る形見わけ
人情の弱點を穿ち過ぎて餘りに酷なる心地す。併し事實なるを如何せん。かの赤穗の城渡に、お金配分を唱へし小野九太夫氏は、この露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は、尋常茶飯の出來事を捉へて、能く滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事・傳說・史實等を題目として、その縱橫自在なる口吻を弄せり。

戸隱も神樂のあひだ髭をぬき

戸隱　長野縣水内郡戸隱村なる戸隱山、手力雄神を祀る。
附會　牽强

袋草紙　藤原清輔の著、歌學の書。
忠盛　平清盛の父。

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふべし。鑷（けぬき）に髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる働あり。御紀行拜見に能因は當惑し。

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。天日に焦して顏だけは黑めたれど、紀行までは手が屆かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但し袋草紙に、「一度においては實か。八十島の記を書けり。」とあり。

忠盛の高名の場を犬がなめ抱きこめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、容

隼太　賴政の郎等猪隼太。
盛衰記　源平盛衰記。

時致　曾我五郎時致。
大磯　神奈川縣中郡大磯町。
曾我物語　十卷、作者未詳。

易に及ぶべからず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり。

盛衰記、賴政鵺を射る條に、「黑雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと矢どころ定かならず」とあり。乃ち郎等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあててまご〳〵する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者は、いかなる剽輕者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ兄祐成が急を救はんとして、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我物語中の出色の快譚なり。之を圖にして大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉

なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび

戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乘力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを二度まで轉びたりと誇張したるに、大なる可笑しみを生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙を言はで、突然に仕立たる處に一種の面白みあるなり。

釣れますかなどと文王そばへ寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「などと」の語、胸に一物ある趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

佐野　源左衛門常世。

戸塚　神奈川縣鎌倉郡。

道風　小野氏。

文王　周の武王の父。

太公望　呂尙、文王・武王を輔けて天下を一統せしむ。

○

番丁で目明めくらに道を聞き
帷子の賣上帳に雉子も見え
草鞋くひ迄は能因氣がつかず
忠盛はかへると糠で手を洗ひ
道風は飛んだものにて悟る也
三保谷が歸りは首に日が當り
喰ひつぶす奴に限つて齒を磨き

一五　光賴參內

十九日　平治元年十二月十九日。

さる程に內裏には、同じ十九日公卿僉議とて催されけり。

光頼　藤原顯頼の子、權大納言正二位に進み、桂大納言といふ、この時年三十六。

信頼　藤原信頼、光頼の甥、時に年二十七。

勸修寺左衞門督光頼卿、此の程は信頼卿の擧動過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて、殊に鮮かに束帶引きつくろひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傅子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雜色の装束にいでたゝせ、「自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、其の外清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張りて所々門々を固く守

長方　藤原顯長の子、從二位權中納言に至る、時に年二十。

母方の舅

顯頼 ─ 光頼
　　└ 惟方
　　└ 女（忠隆の室）─ 信頼

護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、其の座の上薦達皆下にぞ着かれたる。光頼卿「こは不思議の事かな。人はいかにふるまふとも、彼は右衞門督、我は左衞門督なれば、下には着くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしけるに、「今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ。」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を

衛府督　右衛門督信頼を指す。
僉議　詮議
つい立ちて
さんぬる

失はれければ、着座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の裾引直し、衣紋つくろひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて參内する所なり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり。」とて、靜々と歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵どもこれを見奉りて、「あはれ此の殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、此の人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なる者、「昔頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。其の頼光を打返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。」と言へば、又傍より、「など、其の頼信を打返して信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。」と言へば、壁に耳、天に口といふ事あり。怖ろしく。聞かじ。」と言ひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

光頼卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板高らかに踏鳴して立たれたりけ

頼光　源滿仲の子。大江山の山賊退治を上て顯る。
頼信　頼光の弟、平忠常の亂を平ぐ。

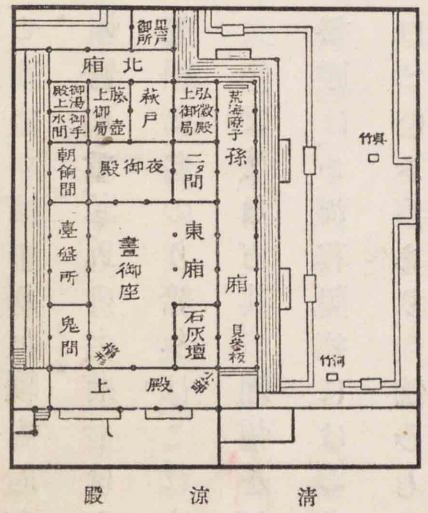
惟方　藤原惟方、檢非違使別當なり、時に年三十五。

あなり＝あるなり

少納言入道　藤原通憲入道信西。

神樂岡　今の京都市の東北の郊外。

るが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議して催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなり。傳へ承る如きは、其の人皆當時の有職、然るべき人どもなり。其の中に入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外然るべからざるふるまひかな。近衛大將檢非違使


萩の戸
御所
北廂
御湯殿上の間
御手水
上臈御局
壺
萩戸
弘徽殿上御局
荒海障子
孫廂
夜御殿
二ノ間
東廂
朝餉間
臺盤所
臺御座
石灰壇
鬼間
上殿
殿
涼
清
簀子
簀子
簀子

大貳清盛　清盛當時太宰大貳の官にあり。
切目の宿　和歌山縣日高郡にあり。
珍事　椿事

讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉・紀伊國・伊賀・伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなり。信賴卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。又火などを懸けなば、君も爭でか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、此の時に在るべきをや。右衞門督は御邊に大小事を申し合はすとこそ聞ゆれ。相

主上　二條天皇。
上皇　後白河上皇。
內侍所　賢所。
ござんなれ　＝こそあるなれ

構へて相構へて隙を伺ひ、玉體恙なくおはします樣に思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黑戸」御所に。「上皇は。」「一本御書所に。」「內侍所は。」「溫明殿に。」「劒璽は何處に。」「夜の御殿に。」と、左衞門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

「又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衞門督住み候へば、其の方樣の女房などぞかげろひ候らん。」と申されければ、光賴卿聞きもあへず、「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信賴住み、君をば黑戸御所に遷し參らせたなり。末代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天

照大神・正八幡宮は王法を如何守り給ひぬるぞ。異國には斯様の例ありと雖も、我が朝には未だ此の如き先蹤を聞かず。「前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚る所なく口説き給へば、「惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、「吾いかなる宿業に依つて、かゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、袍の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみては、打萎れてぞ出で給ひける。

（平治物語）

前代未聞　前古未曾有

許由　支那古代の隱者、堯の天下を彼に讓らんとするを聞きて耳汚れたりとて潁水に洗ふ。

平治物語　三卷、作者未詳、平治の亂の始末を記したる軍記物語。

攝家　執柄家　清華　羽林家　上達部
堂上家　地下人　女院　女御　女嬬

一九　方丈記

鴨長明

一　行く川の流

行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中にある人と住家と亦かくの如し。玉敷の都の中に棟を竝べ甍を爭へる尊き卑しき人の住居は、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは

鴨長明肖像

鴨長明　後鳥羽上皇の時和歌所の寄人となる、後に出家す、建保四年（約七一〇年前）歿、年六十四、方丈記は其の著。

行く川　子在川上曰逝者如斯不舍晝夜（論語）

かつ…かつ……あるは…あるは……

大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。また知らず、假の宿り誰がために心を惱まし、何によりてか目を悅ばしむる。この主人と住家と無常をあらそひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。あるは露おちて花殘れり、殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。

知らず……

朝顏の露　人生如二朝露一。（漢書）

二　世の不可思議

凡そ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる閒に、世の不可思議を見る事やゝ度々になりぬ。去んぬる安元三年卯月二十八日かとよ、風烈しく吹きて靜かならざりし夜、戌の時ばか

安元三年　高倉天皇の朝、此の年八月治承と改元。

戌の時　午後八時。

——（筆蹟龍藤伊）火業の元安——

巽　辰巳、東南の方角。
乾　戌亥、西北の方角。
かと（いふ）
よとかや（いふ）
纔かに　僅かに
七珍　金・銀・瑠璃・車渠・瑪瑙・珊瑚・琥珀。

り、都の巽より火出で來りて乾にいたる。終には朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が間に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けりとなん。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりは、ひたすら、焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映りて普く紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焔飛ぶが如くにして一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらんや。或は煙にむせびて仆れ伏し、或は焔にまぐれて忽ちに死しぬ。或は又纔かに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍・萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり、ましてその外は數を知らず。すべて都の中三分の一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬・牛の類邊際を知らず。人の營みな愚

なる中にさしも危き京中の家を作るとて、寶を費し、心を惱ますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日のころ、中御門京極のほどより大いなる辻風起りて、六條わたりまで嚴しく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中に籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁・柱ばかり殘れるもあり。また門の上を吹放ちて四五町が外に置き、また垣を吹拂ひて鄰と一つになせり。況や家の内の寶、數を盡して空に揚り、檜皮・葺板の類、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如くに吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りどよむ音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、これを取繕ふ間に身を害ひてかたはづけるもの數を知らず。この風、坤の方に移り行き

中御門　待賢門の通稱、それより東に通れる筋。

業風　業火

かばかりは（あらじ）とぞ

坤　未申、西南の方角。

て、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。只事にあらず。さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし。」

三　日野山の閑居

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々にかたぶき、住家は折々にせまし。その家のさま世の常ならず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけたり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる

日野山　京都府宇治郡醍醐村。

いはば旅人　亦猶下行人之造二旅宿一、老蠶之成中獨繭上矣。其住幾時乎。（池亭記、慶滋保胤）

外は、さらに他の用途いらず。

いま日野山の奥に迹をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に、小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち、和歌管絃往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に、箏琵琶おの〳〵一張を立つ。いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて、夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方に、すびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占めて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはち諸〻の藥草を植ゑたり。假の庵の有樣かくの如し。

普賢　文殊と共に釋迦佛に侍して佛法を輔くる菩薩。

不動　五大明王の一、其の中央に居る大日如來の化身。

往生要集　六卷、源信僧都の著。

沿へて　添へて

植ゑ

讀經　着經

日野山附近の圖

その處のさまをいはば、南に筧あり。岩を疊みて水を溜めたり。林、軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら、迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲のごとくして西の方に匂ふ。夏は子規を聞く、かたらふ毎に死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に滿てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は、雪を憐れむ、つもり消ゆるさま、罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。ことさらに、無言をせざれ

迹の白波　世の中をかけてたとへむ朝ぼらけこぎゆく船のあとのしら波。（拾遺集、沙彌滿誓）

岡の屋　宇治川の東岸。

滿沙彌　笠麿剃髮して滿誓といふ。元正天皇の時の人。

潯陽の江　潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟々。（琵琶行、白樂天）

源都督　桂大納言源經信、琵琶の名手、承德元年（約八三〇年前）薨、年八十二。

秋風、流泉　琵琶の曲名。

ども、ひとり居れば口業ををさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らん。もし迹のしら波に身を奇する朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江を想ひ遣りて源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しば〳〵松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて自ら、心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち此の山守が居る處なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれ〴〵なる時は、これを友として遊びあるく。彼は十六歲、我は六十、その齡殊の外なれど、心を慰むることはこれ同じ。あるは、つばなを拔き、岩なしを採る。又ぬかごをもり、芹を摘む。あるは、すそわの田居にお

木幡山、伏見、鳥羽　京都府紀伊郡。

羽束師　同縣乙訓郡。

勝地は　勝地本來無二定主一、大都山屬二愛レ山人一。（白氏文集）

炭山、笠取　京都府宇治郡。

岩間　滋賀縣滋賀郡正法寺の觀音。

石山　同上石山寺の觀音。

猿丸太夫墓　滋賀縣栗太郡田上村大字曾束。

眞木の島　京都府久世郡。

山鳥の　山鳥のほろほろとなく聲きけば父かとぞ思ふ。母かとぞ思ふ。（玉葉集、行基）

りて、落穗を拾ひて、ほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて遙かに故郷の空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。おゆみ煩なく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき、炭山を越え笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓をたづね、歸るさには、折につけつゝ、櫻を狩り紅葉をもとめ、蕨を折り木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は、遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く剛れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるは埋火を搔きおこして、老の寐覺の友とす。恐ろしき山ならねど、梟の聲をあは

峯のかせぎ　山ふかみなるかせぎのけぢかさに世に遠ざかる程ぞ知らるる。（西行）

恐ろしき山　山深みけぢかき鳥の音はせで物おそろしきふくろふの聲。（西行）

三界　欲界・色界・無色界、華嚴經に「三界唯一心、心外無二別法」とあり。

着す　卽す

れむにつけても、山中の景氣、折につけて盡くることなし。いはんや、深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。

大かた、この處に住み初めし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから、事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして數ならぬたぐひ、盡して之を知るべからず。度々の炎上にほろびたる家又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

それ三界はただ心一つなり。心もし安からずば牛馬・七珍も由なく、宮殿・樓閣も望なし。今さびしき住居一間の庵、みづから之を愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。

もし人このいへる事を疑はば、魚鳥の分野を見よ。魚は水にあかず、魚にあらざれば其の心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰かさとらん。（方丈記）

軍記物語は武人の興隆に伴ふ內面苦惱の生活を書いたもので、其の中に現れたのは、概して勝利者の方から見た光明面の時代相であるが、敗北者の側から見た世の中のみじめさ・あはれさを痛切に描き、時代の暗黑面に對する落伍者の悲觀的時代觀を鮮かに寫して、軍記と反對の方面に重き地位を占めるものは、鴨長明の「方丈記」である。

「方丈記」は通例、一通りの隨筆記事と見られて居るが、吾等はこれを以て、一種の叙情的兼叙事的論文とも見るべく、又自家の見聞・意見・生活をそのまゝに書いた一種の小說とも見るべきものであると思ふ。「方丈記」の中には、戰爭に踏みあらされた時代の暗い影がよく寫され、世に背いた作者の寂しい心持もよく現れて居る。之を論文として見れば、劈

頭にまづ「ゆく川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。」といふ作者の人生觀を煎じつめた概括的斷案を下し、次に、其の斷案を實證すべきあさましき事例を列擧して、最後に、故に我は日野山に世を遁れ、幽寂なる自然の間に方丈の庵を結んで、彌陀の來迎を待つて居るのである、と結論したところ、論理の筋が、いかにもよく整つて、讀者にしんみりした感銘を與へる立派な論文である。自然な活きた天成の論文である。

その文章としての特色は、軍記物語と同じく、漢和・雅俗・新舊の二要素の融和された所にある。用語・文體・調子等に自ら時代の味ひが加はつて、一種新たなる文學を成したものである。（方丈記の體製――五十嵐力）

中澤臨川　名は重雄、長野縣の人、工學士、文學者、大正九年歿、年四十三。

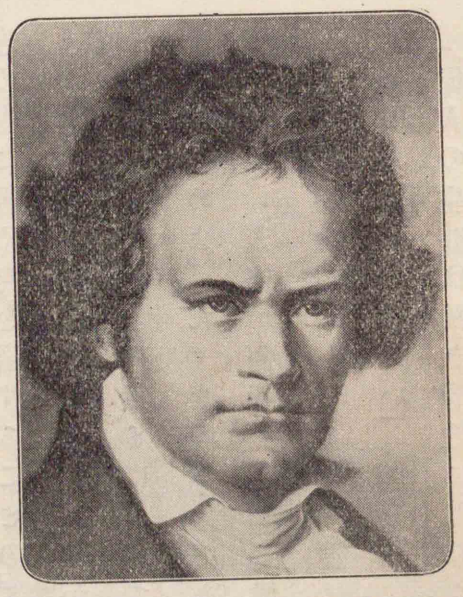
一七　ベートーヴェンの一生

中澤臨川

或時不幸な彼の爲に、神の助を祈つた友人の好意に答へて、ベートーヴェンは斯う言つた。「人よ、汝自ら助けよ！」

「悲しみを經ての喜び」――これが彼の一生の格言であつた。

ルドウィッヒ、ブォン、ベートーヴェンの一生は決して野心家を滿足させるやうな教訓をも逸話をも與へない。それは苦しめる者のために、眞に苦しみ得る力のある者のために、聖なる悲しみの甘露を惠む。



ベートーヴェン

記憶せよ、（特に若き人々のために言ふ）、この世は薔薇の花の敷かれた街ではない。それは偉大を希ふ者のためには常に孤獨と寂寥に追はるゝ山徑である。最も強い者ですら、ある時は悲哀と失望から、おのづと頭がうなだれる場合がある。

記憶せよ、かやうな危險な場合に眞の偉人が汝を助けに來る。

ベートーヴェンが汝に役立つ。

凡庸な利害得失の世俗戰に倦み疲れた時、彼のやうな信念と意志の海に暫く身を浴することの、どれだけ我等のために强味であるかよ。偉人の身邊には言ふべからざる勇氣の感染力がある。

我等をして運と偶然とによつて物質界に成功した著名な人達を忘れしめよ。たゞ心の偉大であつた者だけがヒーローの名に値ひする。人格が何時も人間の偉大さを計る尺度である。我等をして成功を說かしめるな。要は偉大であることにあつて、偉大に見えることではない。

偉人の生涯は長き犧牲に外ならない。悲慘な運命が、彼等の肉と靈との苦しみの鐵砧の上で、彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝夕、苦痛と試錬のパンを食べた。

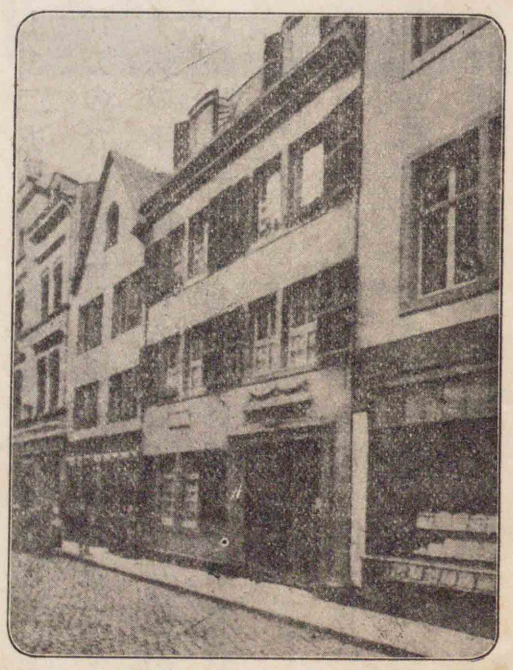
何のために彼等はそれだけ苦しんだのであらう。後の世のより强き仲間を助けるために、彼等に力と惠みを與へるために！

鐵砧　刀俎

ボン　獨逸西部の都會。ライン河畔にあり。

ベートーヴェンは一七七〇年獨逸のボンに生れた。彼の祖父も、父も、その土地の王室附の賤しい音樂師であつた。彼の母は矢張貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖のために一生を一つの樂しみも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは四歲の時から、もう音樂を習はせられた。そして殘酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歲からは或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けねばならな



ベートーヴェンの生家

かつた。

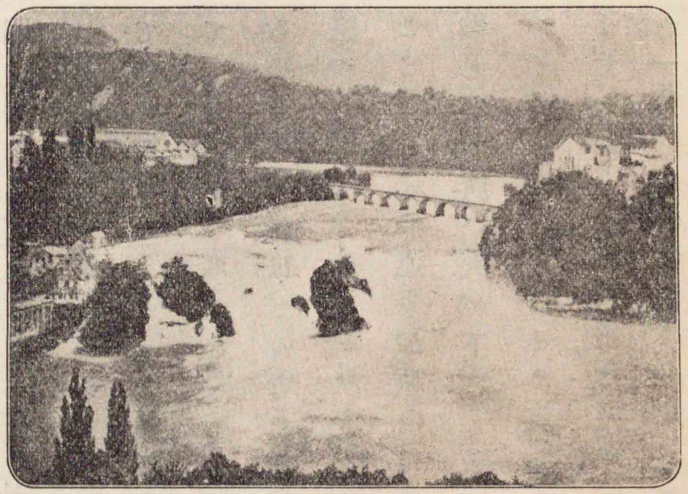
十八歳の時、彼は眞實賴りとしたその母を失つた。彼はその以前から一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなんだ。彼の父は酒のために全く仕方のない者になり了せてゐたので、その受ける養老金さへ直接子供の手へ渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦しい經驗は一生消しがたい深い印象を若き音樂家の胸に與へた。

一七九二年、ベートーヴェンはウインナへ去つた。傷ましい生活の中にも、流石に若く美しい夢の釀された靜かなライン河の岸邊を見棄てることの、如何に惜しまれたであらう。「わが故郷。そこは私が初めて日の光を見たところ。今も昔の如く美しいところ。」と言つて、彼は一生その故郷を慕つた。

その頃から、彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は

ウインナ　オーストリヤの首都、人口約二百十五萬。

ライン河　獨逸の西境を流るゝ河。



ライン河

自分の手帳にかう書きつけた。

「勇氣！　私の身體の虛弱にも拘らず、私の天才は前途に輝くであらう。……二十五歳！　その年齡に今私は達した。……此の年齡は人間が彼の全部を發揮せねばならぬ時だ。」彼はまたかう言つた。「私の藝術は貧しき者を救ふより外の目的に捧げられてはならぬ。」

丁度また同じ頃から、最大の不幸が彼の身體に一生の宿をとつた。彼は聾になり初めた。音樂家がその耳を失ふといふほど悲しむべきことがあらうか。彼は

回復
恢復

プルターク　ギリシヤの歴史家、倫理學者（西暦五〇—一一〇頃）

テレゼ、フオン、ブランスウヰック　ベートーヴェンの友人フラシツ伯爵の妹。

堪へざる苦痛を忍んで、幾年かの間、それを隱してゐた。然し、愈、回復の見込の立たなくなつた時、劇しい絶望を以て、これを友達に打明けなければならなんだ。「親愛なる友よ、お前のベートーヴェンほど不幸なものはない。私の一番貴い部分なる聽感が、今私を捨てつゝある。……凡て、私の感ずる物、私に親愛なあらゆる物を捨ててまで、このみじめな强慾な世の中に生き永らへなければならない私の一生は、どんなに悲慘であらう。」「しば〳〵私はこの身を詛つた。……私は。プルタークから忍從の德を敎はつた。能ふことなら、私の運命が私のために具へたものを堪へ忍ばうと思ふ。然し、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物があるだらうかと、つく〴〵考へ込むことがある。……忍從よ。悲しい隱れた場所よ、たつた一つの私の隱れ場所よ。」

一八〇六年、彼はテレゼ・フォン・ブランスウヰック女史と婚約した。然るに、この平和もまた永くは續かなんだ。彼等は互に相愛しながらも自然に遠ざかつて了つた。

バカス　ギリシヤ神話の酒の神。

それからはずつと孤獨の生活が續いた。しかもそれは洗ふやうな赤貧と不遇の生活であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ。」と彼は言つてゐた。ある有名な曲を出した時などは、僅か七册しか賣れなかつた。

愛も野心も去つたあと、彼に殘されたものは、たゞ力のみであつた。その力の喜びと、之を表現する必要とが彼を占領した。一八一二年に、彼を見た一人は、「いかなる皇帝も曾て彼の如く自分の力を意識しなかつた。」と言つてゐる。

當時の或者は彼の曲を指して、醉漢の音樂だと言つた。然うだ、確かに醉漢の音樂だ。然し「俺は人類のために喜びの御酒の口を開けてやるバカスだ。おれは精神の聖狂を人間に與へる者だ。」と

いつた醉漢だ。

彼はナポレオンを見て斯う言つた。「俺が音樂の術を知つてゐるやうに、戰術の心得があれば、彼に教へてやるものを。」と。彼の容貌はナポレオンに能く似てゐた。殊にその意志を現はす締つた口元が。

ナポレオン　ナポレオン一世を指す。

この「未來の人道」を目的として一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として往生を遂げた。

彼は息を引きとる前に自分の一生を顧みて斯う言つた。「喜劇の終りだ。」と。その日は殊に嵐が劇しかつた。二月の寒い空には雪ふゞきがして。

「悲しみを經ての喜び！」彼ぐらゐ聖い喜びに憧れた者はなかつた。悲慘な生活のどん底から、彼は未來の人類のために「喜悅」の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗したあ

リヤ王　セークスピア作の悲劇。リヤ王はその主人公。

オーステルリッツ　當時のオーストリヤハンガリーにあり。西暦一八〇五年、ナポレオンは露墺聯合軍を此地に破れり。

とで、とう〳〵最も晩年にその希望を實現した。「第九旋律曲」といふのがそれである。

曲の中途にオーケストラが急に停まつたかと思ふと、深い神祕な沈默がやゝしばし續く。そして「喜悅」の神が、優しい靜かな歩みを以て人の心の悲しみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがては狂熱の形に變る。そして嵐の中のリヤ王のやうな暴狂に移つたあとで、それがまた靜かな宗教的法悅の境に入り、最後は聖愛の無我鄕で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶ事が出來るか。オーステルリッツの戰勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。

偉大な生の熱愛者よ。汝の口からは常に喜悅の聲が洩れた—

—不幸が汝の命を奪はうとしたその日でさへ、「おゝかくも美しい人生よ。」と。又、「私は千たび繰返して私の生を住みたいと思ふ。」と。

苦しむ者よ、苦しむ力ある者よ。汝の爲には、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟はない。彼は自分が悲慘の項點にゐる時でさへ、彼の實例が後世に苦しむ者のために助となることを望んだ。そしてかう言つた。「憐むべき忍苦者は、己と同じやうな一人の人間――あらゆる自然の障碍にも拘らず、男らしい男になるために、その全力を盡した一人の人間を、こゝに見出して、慰安を感ずるであらう。」と。

（「臨川全集」による）

忍苦
忍辱

和辻哲郎
兵庫縣の人、哲學者、京都帝國大學助教授。

一八　苦患と歡喜

和辻哲郎

人生が苦患の谷であることを、私も亦しみ〴〵と感じる。併し、私はそれによつて生きる勇氣を消されはしない。苦患の中からのみ眞の幸福と歡喜とは生れ出る。

或人は言ふだらう。「歡喜を產む苦患は眞の苦患でない、苦患の形をした歡喜は眞の歡喜でない。君は苦患をも、歡喜をも、眞實には知らないのだ。君の體驗はそれ程に淺薄だ。」と。

併し、私は答へる。「歡喜を產む可能性のない苦患は、生きてゐる人にはあり得ない。苦患の色を帶びない歡喜は、生に觸れない人にのみあり得る。そのやうな苦患と歡喜とは、たゞ息をしてゐるといふだけの、死人に異ならぬ頽廢者などの特權だ。」

體驗
經驗

苦患は戰の徵候である。歡喜は勝利の凱歌である。生は不斷の戰であるから、苦患と離れることが出來ない。勝利は戰つて獲らるべき貴い瞬間であるから、必ず苦患を豫想する。我等は生きる爲に苦患を當然の運命として愛しなければならぬ。そして、電光のやうに時折苦患を中斷する

歡喜の瞬間をば、成長の一里塚として、全力を以て摑まねばならぬ。

苦患の故に生を呪ふものは滅ぶ。生きるために苦患を呪ふものも滅ぶ。

＊　＊　＊

私は痛苦と忍從とを思ふ毎に、年少の頃より眼の底に烙きついてゐるストウックのベートーヴェンの面を想ひ出す。暗く閉ぢた二つの眼の間の深い皺、くひしばつた唇を取卷く莊嚴な筋肉の波。それは人類の惱みを一身に擔ひおほせた悲痛な顏である。そして額の上には、永遠に凋むことのない月桂樹の冠が誇らしくこびりついてゐる。

ベートーヴェンの面（ストウック）

ストウック　獨逸の畫家にして彫刻家、ミュンヘン美術學校教授、貴族に列せらる。

この顏こそは我等の生の理想である。

＊　＊　＊

苦患を堪へ忍べ。

苦患に堪へる態度は一つしかない。そして、それをベートーヴェンの面が暗示する。苦患に打向つて、苦患と取組んで、沈默・靜寂・悲痛の內に、苦患の最後の一滴まで嘗め盡す、この態度のみが耐忍の名に値ひするだらう。

働哭
號泣

苦患に背を向け、感傷的に慟哭し、饒舌に告白する。かくしても亦苦患の終を經驗することは出來る。併し、それを以て眞に苦しみに堪へたと呼ぶことは出來ない。

卑近の例を病氣に取つて見よう。病苦は、病の癒えるまで、或は病が生命を滅ぼすまで續く。言葉を換へていへば、病苦は續く間だけ續く。病氣に罹つた以上は、誰でも最後まで苦しみ通すので

尊卑
貴賤

ある。耐忍するも、しないもない。しかも、我々は、病苦に堪へ得る人と、堪へ得ない人とを區別する。同じ病苦を受けるにも、それほど異なつた二つの態度があるからである。

「然り」と「否」と。受ける態度と遁れる態度と。生きる人と死ぬ人と。これが先づ人間の尊卑をきめるだらう。

＊　＊　＊

生の苦患に對する態度に就いては、それが道德的に大きい意義を持てば持つ程、より大きい危險がある。

病苦は、號泣や哀訴によつて誤魔化すことは出來ても、全然逃避し得る性質のものでない。しかし、精神的な生の惱みは、露出させる事によつて誤魔化し得る外に、また全然逃避することも出來るのである。

ある內的必然によつて意志を緊張させた場合を想像する。喩へていへば、或理想の爲に重い石を兩手で捧げるのである。腕が疲れる、苦しくなる。理想の焰を燃やしてゐる者は、腕がしびれても、眼が眩んでも、齒を喰ひしばつて、その石を捧げ續ける。彼の心は、神の手がその石を受取つてくれる瞬間のために喘いでゐる。

瞬間
刹那

しかし、これと異なつた態度の人は、腕が疲れて來るに隨つて、石を大地に投げ捨てた時の安樂と愉快とを想ふ。そして、自分に囁く、「こんな石を捧げてゐるのは馬鹿々々しいではないか。これを投げ捨てれば、自分の生活は自由に輕快になるだらう。恐らくそこに眞の生活があるだらう。」かういふ自己是認が出來ると共に、石が地に落ちる。彼は苦患を脫する。

かうして、或種の人々は生から逃げ出して行く。そして、次第次第に、息をしながら死んで行く。何物も人格に痕を殘さない、人格は一歩も成長しない。腐敗が何時の間にか核心にまで及んでゐる。

閑却等閑

製作の苦しみは直ちに生の苦しみであるとは言へない。製作の苦しみが人格の苦しみに根を持つ時、初めて貴むべき苦しみになるのである。

＊　＊　＊

生活と製作とは一つでなければならぬ。これは自明のことである。製作は花、生活は根である。一つの生に貫かれてはゐるが、産む者と産まれる者との相違はある。優れた花は十分に張つた根からでなくては咲き得ない。

眞に價値ある苦しみは、たゞ根にのみ關する。たとひ大きい根から美しい花の咲かないことはあつても、枯れた根から美しい花の咲くことは決してあり得ない。根の枯れるのを閑却して、たゞ花のみ咲かせようとあせる心ほど、馬鹿げた哀れなものはないだらう。

（「偶像再興」による）

後篇

花月草紙抄

花月草紙に就いて

三上參次
歴史家、文學博士、東京帝國大學教授。

松平定信

花月草紙六卷、松平定信の著はす所、蓋し文化初年の頃に成りしものならん。この書には著者自らを漁村の老翁に假託せり。この翁、藻を刈り鹽を燒くいとま毎に、心におもひ出づる要なきことを書きしるし、窓の格子に挿みたりしを、白浪のために奪ひ去られぬ。おきな尚懲りずまに、ふたたび挿みしを、白浪また取り去りぬ。かくすることたび重なりければ、終につもりて、この數卷とぞなりし。さればこの書の名は、もと海士の轉りともいふべかりき。然るに、その卷首に、花と月との評論を、いとながくと記したるによりて、かの白

浪、私かに花月の草紙と名づけしなりといへり。

此書は文章も結構も、ともに、吉田兼好が「徒然草」を學びしと見ゆ。はじめ、享和二年の頃にかありけん。定信二豎に侵されしことあり。病やゝおこたりしとき、枕に凭りて、世態、人情のさま〴〵なる中に、自ら、至誠と詐僞とのあらはるゝを想像し、これを古に考へ合せて、慷慨に堪へず。自ら之を繪にうつし、文辭を加へて誡めを寓したり。之を心草紙といふ。これ後年にあらはれし「花月草紙」の小模型なりといふべし。そも〳〵定信が、これまで、殆ど六十年の經歷の中に、目に觸れ、耳に入り、また胸に浮びしさま〴〵の事多くは錦繡の文字に寫されて、この花月草紙の中にあらはるゝことなれば、予は、一たびこれを繙かんことを、讀者に勸めざるべからず。而してその事柄は、農工殖産等の實際に適切なる談話あり。老佛、程朱の學問、或は人の情慾などにつきて、深邃なる哲理あり。小松内府は死を祈りしにあらずなどいへる、歴史上の見識あり。特に、しば〳〵人倫五常を說き、人の、この世に處すべき注意を陳べたるところには、讀者をして覺えず襟を正しうして、身を省みしむること多し。而して其の間に、高妙奇拔なる花鳥風月の評、或は詩歌書畫の論など交りて、また能く讀者を怡ばしむ。

すべて所謂雅文は、平安の朝の和文を摸したるものなれば、優美にして婉柔といふ一方の原素には富みたれども、遒勁にして崇高なる原素には乏し。花月草紙の文もまた、この通弊を免れず。或る點においては、かへりて、その流暢なる通俗文に

讓るところあり。されども、その文體こそは平安朝のものなれ。盡く古き格に拘泥せるにはあらず。用ひたる語も、また古雅に過ぎずして、漢語さへ多くまじれり。されば、優婉にして流麗なる中に、おのづから峭然たる氣骨の見ゆるは、さながら、定信其人に對するが如き想あらしむ。而して、其筆の縱横自在にして、意の行く處に從はざるなく、情の趣く處に伴はざるなきは、蓋し、巧みに「徒然草」の神髓を得たるものならん。

花月草紙は、上に云へる如き性質のものなるが、序を以て茲に云ふべき事あり。そは泰平なる江戸時代の樂天主義が、この草紙の中にも表はるゝことなりとす。夫れ兼好の「徒然草」は、孔孟の教も云はざるにはあらねど、もと佛說を基礎とし、之に加ふるに、老莊の論を以てせるが故に、その大體は厭世主義の評論なり。されども、「徒然草」には、なほ多少の樂天主義の痕なきにはあらず。かの鴨長明が「方丈記」に至りては、うき世を厭ひ、少しの望みをもこの土に繫がざるさま能く無常を感ずることの深かりし鎌倉時代の文學の眞の相を表はしたり。花月草紙は卽ち正しく之と反對の地に立ち樂天主義の評論として德川時代の文學殊に隨筆の眞相を示せるなり。これを著者の一身に就いて云ふもその「樂む翁」といふ名こそ、既にこの主義を表はせるなれ。嘗て一の谷なる源平合戰の繪卷を評しける中に「子をおもふは誠なり。世を棄つるは迷なり。」といひし一言を味ふべし。また秋の夕暮は悲しきもの哀れなるときの限りとして詩人歌人のよむものなるに定信がこれを詠

みしうちには
　いづるやと月まつ外は秋とても
　　おもふことなきやどの夕ぐれ

といへるあり。これまた樂天主義の一現象ならん。徳川時代とても佛教は極めて盛なりき。されども泰平久しく打ちつゞき上は厚生利用の道に注意し、下は擊壤鼓腹の樂を享く。物質上の進歩何れの邊にも著く、且つ文學に從事するほどの人の精神は儒教によりて支配せられし時代なれば、かゝる文學の表はれしこと、こに詳かに論せずとも自ら明かならん。況や定信の如き得意の人に於てをや。

（白河樂翁公と徳川時代）

○

松平定信は田安宗武の第三子にして八代將軍吉宗の孫に當る。安永三年奥州白河城主松平定邦の嗣となり天明三年封を襲ぎ越中守と稱す。同じき七年老中首座に任じ侍從となる。時に綱紀大に紊れ凶災相繼ぐ。定信將軍家齊を輔けて鋭意治を圖り所謂寛政の改革を成す。寛政五年老中及び輔佐の職を辭す。而もなほ久しく政務に參與せり。九年致仕して樂翁と號し專ら風雅を樂しむ。文政六年特旨を以て封を松平家の舊封勢州桑名に移さる。同じき十二年五月十三日病みて卒す年七十二。定信政治に通じたるのみならず又文章を善くし和歌に巧みなり。著述勘からず花月草紙・三草集・集古十種等最も著はる。

一　序

久しう浦わの里に住める翁ありけり。めかり鹽燒く暇には、えうなき藻屑かいあつめて、しほやの窓の戸にかいはさみ置きたるを、世のえせものの取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、こりずまにかいはさみ置きたり。かく白涙のよるゝごとに數も積みしかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。この藻屑の端つ方に、月と花との事ながゝしく書いたれば、それをもて名たてしは、かのえせもののせしことなりとぞ。「海人のさへづりとこそ言はまほしけれ。」と里の子は言ひき。

二　なしと聞けば

「なし」と聞けば「あり」と言はまほしく、「悪しき」と言ふをば「善き」とこ

とかへて言はんこそ、いとねぢけたる事なれ。櫻てふ花は我が國のものなるを「唐國にもあり」とてさまざま例など引き附くれど、櫻書いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、「なし」とこそ言ふべけれ。

いでや櫻といはでしも、花とだにいへば、こと木には紛れぬものを。ほのぼのと明け行く山際、雲か雪かとばかり咲き滿ちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひも朧に見えて、此處にのみ暮れ殘すけしきなど「いふは淺かりけり。さまいて、うてなのびやかなれば近劣りする。」などいふは、かのことか

へてざえおぼえ心に言ふことなりかし。風に散りかふも、雨に濡るるも、遠山に見るも、軒端に向ふも、曙も夕暮も、露のひるまも、めかる時しなきを、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたけく、匂さへこちたからぬも、あやしきまでにこそ覺ゆるものなれ。さるを、「何處にもあり」といふは更なり、「曙・夕暮」などと面白からんやうにことば添ふるは、いまだ深く染めし心にはあらざりけり。すべて、ことばもて言ひ盡さんと思ふは、いと淺き心かな。

三　月のさしのぼる頃

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるにやゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほど、あやにくに月の方より雲のうちへかき

入るやうに見ゆ。こはいかにせんとしばし打ちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出で離れたらばはやかゝらん隈あらじと思ふに、いつのまにかまた白雲の月待顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれて打見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ち居たる雲にむかへば、また馳せ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで見居たるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと向ひ居たれば、心のはてなきやうにこそ覺えしか。

心のはてなき　行方なく月に心のすみ〳〵て果はいかにかならんとすらん（西行）

四　親に孝する

親に孝するは、この身を人となしたまへる御惠、山よりも高く海よりも深し。またその親もわれも子等もかくながらふるは、君の

山よりも　父德者高ノ山、須彌山尙下、母德者深ノ海、滄溟海還淺。（僧安然、童子教）

御惠なりといふは淺かりけり。そのむくいにて、孝し忠するものにはあらす。人知らぬ深山の梅の花とても薫らざるはなく、深谷の鶯とても啼かざるはなし。子となりては必ずかく、臣となりてはかくあるべき道は、もとより人にそなはりたる事にて、鳥・獸も親を慕ひ子をはぐくみ、兎牛のことさへ語り繼ぐものを。

兎牛のこと　華州村有ニ畊田者ニ。枕ノ犂而臥。虎欲ノ噬之。牛輙以ノ身立ニ其人之體上ニ、左右以ノ角拉ノ虎。虎不ノ得ノ食而去、其人則熟寢而未ニ之知ニ也。覺而惡之、意爲ノ妖、歸而殺之、食ニ其肉ニ而不ノ悔。余聞ニ其語ニ感而書ニ兎牛ニ云。（司馬溫公、兎牛問）

五　かの人は

「かの人は雪・螢あつめし窓に年を積みて、ふみ見る道に心を盡し侍るなり。されば、世の中の事にはいとうとく侍り。」といへば、「さるこそ誠の道まねぶ人なりけれ。」と譽めものするものありとや。もとより道まねぶものは、五つの常・五つの道よりして、人を治め己を修むる道まねぶより外のことはなし。されば、世の事にさとく、今のあたりのみかは、千年の先つ世の事、見ぬもろこしの昔、今のさま

雪螢あつめし　晉の車胤が螢火に、孫康が積雪に映じて讀書せし故事

五つの常　仁・義・禮・智・信。

五つの道　父子有ノ親、君臣有ノ義、夫婦有ノ別、長幼有ノ序、朋友有ノ信。（孟子）

より、さかり衰ふるきざし、人の心の上より仕ふる道のくさ〳〵に至るまでも明かなるこそ、道まねぶ人とは謂ふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とは謂ふべからんと。

六　ひでり續く頃は

ひでり續く頃は、こちかぜ吹きて雲の出でたるにぞ、さらば今日こそは降り出づらめと見るに、その風もいつしか止みて、雲もむらむらと絶間がちになれば、はや日の影のきらめき出でぬ。また雨の降り續く頃は、松吹く風の音いさぎよくて、はや霽れなんと見れば、雲間もはやむら〳〵と青く、入日の方はこちたきまで紅深く見ゆるにぞ、「こよひの月夜明らけくこそ。」と思ふに、月出づる頃は雲出でて、また玉水の音するものぞかし。代々の亂れ治まるきはも、わが心の上も、この如きものとかや。

こよひの月夜

わたつみの豐旗雲に入日さしこよひの月夜あきらけくこそ（萬葉集、天智天皇）

七　月の夜半こそ

「月の夜半こそ、思ふくまもなく心のそこも澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、また優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを。」といふ。「いかに。」と問へば、「いでや、旱天の雨はさらなり、草木の花咲き實るも皆この惠にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそか、のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。凡て春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣濕せごも降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、棲み捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの枯生の底に綠やゝ添ひ行くも、柳の絲のうごきもやらで

露そふも、ともにいと長閑なり。燈火挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし。その外、梅が香のしめり、夜深くにほひわたるも、『花にうし。』とかこちぬるもあはれはありけり。春も老い行くころ、蛙の時得顔にすだくもをかし。

杜鵑の初音をいかにと思ふ頃、村雨のはら〳〵と降り出でたるも、五月雨の幾日も降り暮らして、文の卷々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中のことにも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬるころ、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹き落ちたるに、柳・蓮葉なんどの葉裏しろく見せたるもすゞし。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降りきて物音も聞えず、土のにほひきたるもいと心地よし。軒端は玉のすだれ懸けたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし、又は水はしらせたるに、人々しばし物言はでうちまもり居たるもをかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空のひとしほ碧に見えて、虹なんど見ゆるに、木々のみどりの庭潦にかげ見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷の音におどろきて這ひ出でたるが、『今日のは若かりし時のごとよ。』く霽れにけり。今時のはかく霽るゝことと稀なり。』なんど、はや繰言いふもあり。『かれはかくあわてき。』などいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、『今日は蚊も少かるべし。かみの音もいとかすかなり。このごろの暑さも忘れぬ。』とて端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、ものまち顔に空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。

秋くるころの雨は昨日にかはりて、何となうさびし。荻の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身に沁むこゝちぞする。常に聞き馴れし筧の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいて、やゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴き寄るもあはれなり。『この雨に木々も染みなん。』と思へば、『茸などもおひ出でなん。栗もはや落つべし。』などと、わらはべの物さびしげに、燈火にむかひつゝ言ひ出づるも、げにさまゝ〳〵なり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、鐘撞く人の心までもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染め添ふも、白菊のうつり行きて一さかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽の恨み深く咲きたるあたりもつきゝ〳〵し。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、ひる過ぐるまで萎みおく

れたる、又あはれなり。野分の風はおごろ〳〵しきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは、秋の習ひなるべし。時雨のさと音して夕日に白く降りくるも、又音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや。』といへば、『かうやうに云ひ並べては、げにもと言ふべからんが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心はかはらじ。』と心の中に思ひて聞き居しも、またをかしかりけり。

八　ことわりなきが

ことわりなきが、ことわりのまことなり。ことわりのごと行はるゝものならば、何の難き事もあらじを、さも知らで、人と爭ひ政を誹りなどしてたかぶる者は、ことわりのまことを知らぬとやいふ

らん。

九　傍より

傍より言ふ事は、いとよくあたるものなり。「かの人は衰へ給ひき。」といへど、鏡見てもさは思はず。「かれは今かくすれど、後には悔い思ふべし。」などいへど、知らざるものぞかし。私の心だになくば傍にて見ると同じかるべし。

一〇　四つの時

四つの時の移り行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるを、りの花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふはいとくるし。散れば又こん年は咲きぬべし。いかに心を苦しむとも、霜白く氷堅きをりに、蓮の咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち散る

を惜しむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

一一　酒過ぐれば

酒過ぐればいよ〳〵飲ままほしく、行ゆるめばいよ〳〵亂る。わざはひ臨めば、自らうながすものとかや聞きぬ。

一二　道路は

「道路は足底の廣さだにあらば、あゆむべし。」といふは、例のことわりのみなり。いかであゆむべからん。梁の上をあゆまば落ちぬべし。こは、かの陳氏の言ひたる餘地なきなり。あまりに事には、なはだしく、物にせちなれば、行はれぬのみかう、とまれぬべし。こは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。

かの陳氏の顏氏家訓に、「人足所履、不過數寸、然而咫尺之途、必顚蹶於崖岸、抱梁之梁、毎沈溺於川谷者、何哉、爲其傍無餘地故也。」とあり、これによりしか、陳氏は顏氏の誤ならん。

おもてにかきす　不レ學牆面、莅レ事惟煩。（書經周官篇）人而不レ爲二周南召南一、其猶二正牆面立一也與。（論語陽貨篇）

一三　目しひしもの

目しひしものの人の言ひ難きことをも言ふは、色も見えず、氣色にも知らねば言ふなりけり。暗き人は、わがあしきも見えねば、よしと心得て人に恥ぢざるは、目しひし人の類なり。されば、古より「おもてにかきす。」などとも言ふめり。

一四　月なき夜半は

月なき夜半は、いと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて暗うして、寄せ來る波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ風の袖にそよと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はなほ蟲の音も競ひ行くに、千草の花の色も見えて、沖漕ぐ船にまがふ雁がねの渡るも、何處なるらんとあはれなるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいて曉頃に月の出づれば、宵の入日の殘れるたぐひにはあらず。海のおもて黃金の波の滿ち來るにぞ、言葉にものぶべしとは思はれず。昔いぎたなくて、有明の月にうとかりし頃もありけりと思へば、口惜しきものから、又羨しく思へり。

沖漕ぐ船に　雁の連ねて鳴く聲、かぢの音にまがへるを打眺め給ひて。（源氏物語須磨の卷）

それより思の移り行きて、げに古はあしき波にも舟浮けて鰹釣りしこともありき。又はいと寒き頃、海に入りて鮑とりしこともありしが、今のわかうどは、まだきに老いぬるさまするものぞ多き。その頃の昔物語に聞けば、「浦曲の戰のおそろしさに、妻子打連れて深山へ入りし世もあり。」と聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝる事も、かのわかうどの老いたるさまするをも、あはせて言はまほしけれど、また例の老いぼれて繰言いふとやむづかりなん。

日に新なり
苟日新、日々新、又日新。（湯之盤銘）

一五　凡そ躬行にてもあれ

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、事々に新に、物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、かねて知れる事と思ひてやぶれとるも多し。かの賢き人も、女などに迷ひ、愚なる人に欺かるゝも、ひとつ〳〵に新ならねばこそありけれ。昨日憎しと思ひしこと心にそみ、去年の嬉しと思ひしこと心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして、身を終ふるまでも忘るな。」と語りし老人もありけり。

一六　友に交る道

管鮑の交
管仲嘗歎曰、吾少窮困時、嘗與鮑叔賈、分財多自與、鮑叔不以我爲貪、知我貧也。……生我者父母、知我者鮑叔也。此世稱管鮑善交者。（列子力命篇）

「友に交る道は、いかなることか心得べき。」といふに、友はその所長を友とすべし。ふるきこと好むには、そのことに友とし、武技好むには、それに友とし、歌詠むものにはその道に友とするぞよき。さるに、歌とても、「このふりはあしかり。かれにまねび給ふは僻事なり。」などと言ふにもおよばじ。たゞ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交といへども、この二人、おなじ徳、おなじ心なりしにもあらじかし。世のなかにおなじ心の人といふものは、いと稀なることなるべし。たゞわが好めるかたに引入れんとするもうるさし。この人このところは長じぬれど、こゝはいと短し。その短きところを引きのべんとするはいと苦し。さ思ふわれも亦その短き所あるものを。ことに思ふこと皆諫め物せんとするを、かの信と思ふは違へりけり。交るがうちにも、知己の人は、いと稀なるものなり。それらよく言葉を求めなば、もとより言ふべし。されど、

しば〳〵すべきにはあらずかし。淺き契の友なりとても、友といふうちならば、その人の上の存亡にかゝはるばかりの事ならば言ふべし。すべて、強ひて、かくせん、かくすくひてん、とまげてもと思ふは、みな中道にはそむけりといはん。たゞその所長を友とすれば、交りがたき人もなく、われに益なき友もあらじ。かの友によて、わが方の亂れんとするは、みなその短を友とする故なり。」と答へしものありきとや。

一七　閉藏の氣

閉藏の氣一度變じて開け出づる頃は、必ず風吹き雨もはげし。又のびたる陽氣の一度變じてひそまらんとする折も、かくあるなり。いかで雨・風の、花をねたみ、紅葉のあだをなさん。おなじく降る雨なれど、ひとへの花にはは散りなんと恨み、八重の方には咲き初めんと待ちものし、「この雨いつかはれなん。」と麥搗くものはいひ、「雨こそうれしけれ。」と苗植うるものはいふらん。麥搗く方の雲をはらし、苗植うる空は降らせんとは、いかであらん。小民うらみ歎くは絶えぬものとやいはんかし。

閉藏の氣　淮南子天文訓に「萬物閉藏」とあり。萬物閉ぢかくるゝ意にて冬の氣のこと。

一八　わが惡しきをば

わが惡しきをば桀紂を引きてなだめ、人の善きをば堯・舜を引き出でてとがむ。「かれはかゝる惡しき事なしぬ。」といへば、「げにさあらん。」といふ。「このものかく善きことし侍りぬ。」といへば、「いかゞあらん、いぶかし。」といふ。「げにも人は惡しき心あるものかな。」といへば、「善き名得まほしと思ふが故に、人の惡しきにてわが心をなだめ、人の善きをば嫉むより出でくるなり。」といひき。

桀・紂　夏の桀王・殷の紂王、共に支那上代の暴君。

堯・舜　堯帝と舜帝、共に支那上代の聖人。

玉勝間抄

玉勝間に就いて

柚利淳一
松本高等學校教授。

玉勝間は本居宣長翁の隨筆である。「かつま」は籠といふ意で、卷頭の言草のすゞろにたまる玉かつまつみて心をのべのすさびにといふ歌によつて、この書の性質が窺はれる。この書は宣長が六十四歳の正月に稿を起し、それからずつと卒去の年まで九年間書き續けたものである。一部十四卷より成る。

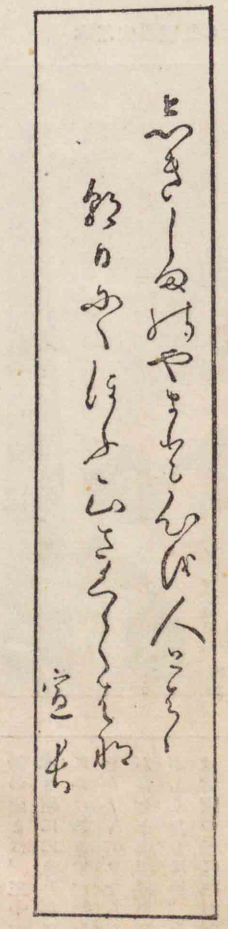
本居宣長

玉勝間の内容は、隨筆であるから隨分多種多様で、或は古道を說き、文學語學を論じ、或は有職故實の考證、或は地理歷史風俗の研究について、その該博な智識と卓越した識見とによつて、縱横無盡に說き去り說き來り、殆ど應接

筆蹟
しきしまのやまと心を人とはゝ朝日にほふ山さくらはな
宣長

平田篤胤
秋田の人、宣長の門人。國學四大人の一人。

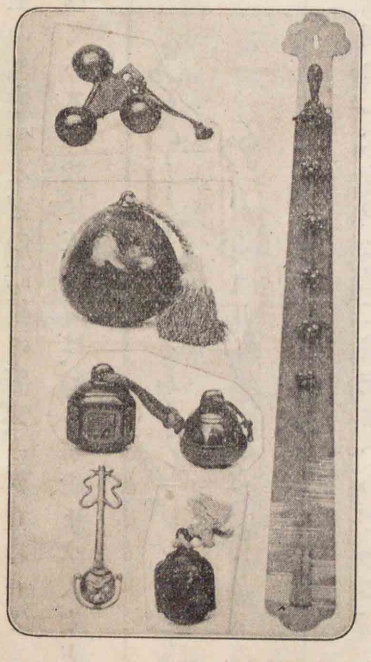
に遑なきほどである。翁の大著古事記傳第一卷の序論として載せられた直毘靈、その他、玉くしげ・呵刈葭などに現れた古道に關する論議の片鱗は、明かに此の隨筆中に認められ、また古事記傳はもとより、源氏物語玉の小櫛・古今集遠鏡などの古典の註釋、石上私淑言のやうな歌論、詞の玉の緒・紐鏡などの語學の研究、それらの一端も亦この書中に跡づけられてゐる。故に玉勝間は、翁の學說及び人生觀を、また翁自らの傳記を、縮圖にしたものと見て差支ないのである。



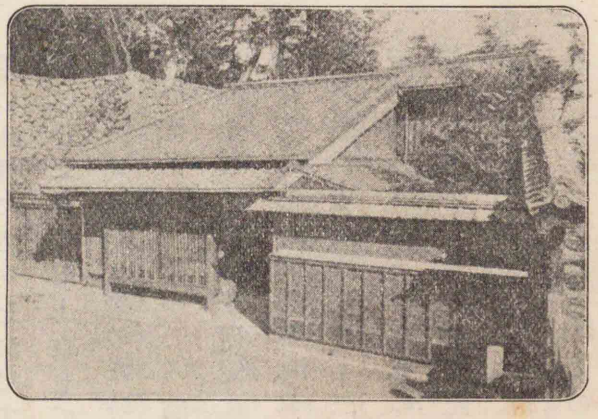
併しながら此の書は、淡々たる談理の小話柄を、あるにまかせて盛つたものでなく、思想家としての反省沈着、人格より滲み出る溫厚和平のヴェールを被つて、一道の熱火が烈々として燃え上つてゐるのを感じる。とはいへ、翁には平田篤胤ほどの激しさと爭氣とはない、誘惑と脅

迫とはない。翁にとつては、道を天下に行ふことは爲政者のなすべき本務で、學徒はたゞ「まことの道」を研究しさへすればよいのである。道の行ひ方が當を失つても、それを非難攻擊して自ら行ふことは「ひがごと」なのである(「道を行ふさだ」參照)。また道にかなはぬ事でも、世にありて來つた事はそのまゝにさしおいて、別に「まことの道」を尋ねるのが至當なのである(「道にかなはぬ世の中のしわざ」參照)。この邊は、どこまでも實行の努力を回避する學者的態度である。たゞ儒者の矯飾を攻擊して漢意を却け、國學の興隆に苦心する段になると、人間が違つたかと思はれるほどの鋭さと壓力が加はつてくる。しかし、それとても、篤胤の行き方とは性質の違つた、王者の軍を進めるとでもいふやうな、正大な堂々たる攻擊ぶりで、酷薄にならず、あげ足とりにならぬところに、翁一流の長者ぶりが窺はれる。

本居宣長遺愛の鈴



鈴の屋とは、三十六の小鈴を赤き緒にぬきたれて、柱などにかけおきて、物むづかしきをり〳〵引きならして、それが音をきけば、心地もすがすがしくおもほゆ。その鈴の歌は、床のべに我がかけていにしへしぬぶ鈴が音のさや〳〵。かくて此の屋の名にもおほせつかし。(鈴屋集)



本居宣長舊宅

從つて文體なども、どことなく鷹揚で、渾然として玉のやうな氣品がある。縣門の文章家としては、村田春海が人も許し自らも任じてゐたが、春海には背景をなすべき思想が乏しいから、器用な擬古文家としてばかり世間に聞えてゐる。

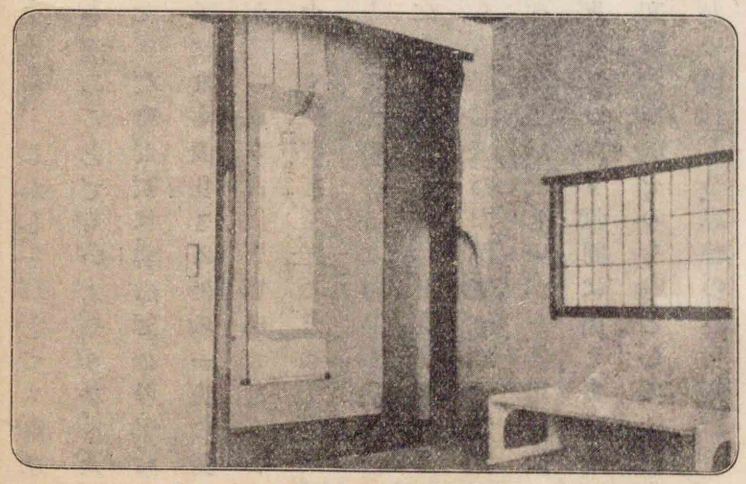
翁の文章は、文章そのものとしては變化に乏しいけれども、思想の裏付があるので、しつかりとして居り、古語の驅使も、彫琢の痕が見えぬまでに自分のものになつてゐて、溫醇雅正の風がある。

享保十五年
中御門天皇の御宇。將軍吉宗時代。

堀景山
名は正超、安藝侯の儒臣、後京都に出づ。篤學精通を以て聞ゆ。寶曆七年（約一七〇年前）歿。

賀茂眞淵
遠江濱松の人、縣居と號す。荷田春滿に就いて國學を學び、後江戸に住す。國學四大人の一人。明和六年（約一六〇年前）歿、年七十三。

翁は享保十五年五月七日、伊勢松坂に生れた。その學問の事歷は、この書の「おのが物學びのありしやう」によつて大體を知ることが出來る。翁の生涯の方向を決定すべき轉機は、二十三歲の時上京して堀景山の門に入り、儒學を修めた時が最初の一つである。このころ翁は契沖の著書を讀んで、國學研究に對する興味をそゝられたと思はれる。第二の轉機は、寶曆十三年、翁三十四歲の五月、賀茂眞淵との會見の時、もしくは其の前後で、翁が古事記研究に志したのは此の頃である（「縣居の大人の御さとし言」參照）。この以後は專ら完成時代で、翌明和元年、三十五歲にして古事記傳の稿を起し、寬政十


本居宣長の書齋

享和元年
光格天皇の御宇。將軍家齊の時代（約一三〇年前）。

稻掛大平
伊勢松坂の人、紀州侯に仕へて側用人となる。

本居內遠
本姓濱田氏、大平の養子となり紀州に住す。

本居豐穎
內遠の子、文學博士、東宮侍講兼御歌所寄人。大正二年歿、年八十。

年、六十九歲の時まで、前後三十五年の星霜を經て、四十四卷の大著が完成されたのである。記傳の著は單なる古典の註釋に止まるものではない。實に翁の哲學全部の組織を表現するものであり、兼ねて日本古代思想史であり、また文明史である。翁は享和元年九月、七十二歲で鄕里松坂に歿した。山室山に葬る。

宣長自筆の標題

翁の著述は凡て五十餘種、古事記傳をその最とする。門人は、鈴屋門人錄に名を列ねたるもの四百八十餘人、就中最も有名なのは平田篤胤と稻掛大平である。大平は後に翁の家を嗣いだ。その嗣、內遠も亦養子であつたが、內遠の長男は本居豐穎博士である。

（「口譯玉かつま」による）

一　古書どもの事

めづらしき書を得たらんには、親しきも疎きも同じ心ざしならん人には、かたみにやすく貸して見せもし、寫させもして、世に廣くせまほしきわざなるを、人には見せず、己ひとり見て誇らんとするは、いと〳〵心ぎたなく、物學ぶ人のあるまじきことなり。但し得がたき書を遠くたよりあしき國などへ貸しやりたるに、あるは道のほどにてはふれうせ、あるは其の人にはかになくなりなどもして、終にその書かへらずなる事あるは、いと心うきわざなり。されば遠き境より借りたらん書は、道のほどのことをもよくしたゝめ、又人の命ははかなる事もはかり難きものにしあれば、亡からん後にもはふらさず、たしかに返すべくおきて置くべきわざなり。凡て人の書を借りたらんには、速かに見て返すべきわざなるを、久しく留めおくは心なし。さるは、書のみにもあらず、人に借りたる物は、何も〳〵同じことなるうちに、いかなればにか、書はことに用なくなりて後も、なほざりに打捨ておきて、久しく返さぬ人の世に多きものぞかし。

また

人に借りたる本に、すでに讀みたるさかひに折りめつくるは、いと心無きしわざなり。本にをり目つけたるは、なほる世なきものぞかし。（一の巻）

二　あらたなる說を出す事

近き世、學問の道ひらけて、大方よろづのことりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、こりぐ〳〵にあらたなる說を出す人おほく、其の說よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、い

まだよくもとゝのはぬほどより、我おとらじと世にことなるめづらしき説を出して、人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。其の中にはずゐぶんによろしきことも、稀には出でくめれど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人に優らん勝たんの心にて、輕々しく、まへしりへをも考へあはさず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじき僻事のみなり。すべて新なる説を出すはいと大事なり。幾たびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりごころをこらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後に、いま一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。（一の巻）

三　道にかなはぬ世の中のしわざ

道にかなはずして、世に久しく有りならひつる事を、にはかにやめんとするはわろし。たゞそのそこなひの筋をはぶきさりて、あるものはあるにてさしおきて、まことの道を尋ぬべきなり。よろづのことをしひて道のまゝに直し行はんとするは、なか〳〵にまことの道のこゝろにかなはざることあり。萬の事はおこるもほろぶるも、盛りなるも衰ふるも、みな神のみ心にしあれば、さらに人の力もて得うごかすべきわざにはあらず。まことの道の意をさとりえたらん人は、おのづからこのことわりはよく明らめ知るべきなり。（二の巻）

四　道をおこなふさだ

道を行ふことは、君とある人のつとめなり。物まなぶ者のわざにはあらず。もの學ぶ者は、道を考へ尋ぬるぞつとめなりける。われはかくの如く思ひとれるゆゑに、みづから道を行はんとはせず。道を考へたづぬることをぞつとむる。そも〳〵道は君の行ひ給ひて、天の下にしきほどこらし給ふわざにこそあれ。今のおこなひ道にかなはざらんからに、下なる者の改め行はんは、わたくしごとにして、なか〳〵に道の心にあらず。下なるものは、たゞ善くもあれ悪しくもあれ、上のおんおもむけに從ひをるものにこそあれ。いにしへの道を考へ得たらんからに、わたくしに定め行ふべきものにはあらずなん。（二の巻）

五　ふみ讀むことのたとへ

須賀直見がいひしは、「ひろく大きなる書をよむは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ所もおほかるを經ゆきては、また面白くめさむる心地する浦山にもいたるなり。また足つよき人は早く、よわきは行くことおそきもよく似たり。」とぞいひける。をかしきたとへなりかし。（二の巻）

須賀直見　宣長の門人、伊勢松坂の人。

六　新に言ひ出でたる說はこみに人のうけひかぬ事

大かたよのつねに異なる新しき說をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者ににくまれそしらるゝものなり。あるは己がもとよりより來つる說と、いたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるに棄ててとりあげざる者もあり。あるは心の中には、げにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに從はんことのね

たくて、よしともあしともいはで、たゞうけぬ顔して過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、其の中の疵をあながちにもとめ出でて、すべてをいひけたんとかまふる者もあり。大かた古き說をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わづかに二つ三つのとるべき所のあるをとりたてて、力のかぎりたすけ用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことをいひたてて、八つ九つのよきことをもおしけちて、力のかぎりは我も用ひず、人にも用ひさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。然れども又まれまれには、新なる說のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、速かに改め從ふたぐひもなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、新なるよき說をきゝては、かくてこそはといみじく喜びつゝ、忽ちに從ふたぐひもありかし。大かた新なる說は、いかによくても、速かには用ふる人まれなるものなれど、よきは年をへても、おのづからつひには世の人の從ふものにて、あまねく用ひらるれば、其の時に至りては、はじめにねたみそしりしともがらも、心には悔しく思へど、おくればせに從はんも猶ねたく、人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、古きをまもりてやむともがらも多かり。しか世の中の論定まりて、皆人の從ふ世になりては、始より速かに改め從ひつる人は、かしこく心さとく思はれ、古きにかゝづらひて、とかくとゞこほれる人は、心おそく、いふかひなく思はるゝわざぞかし。（二の巻）

七　おのが物學びのありしやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなん、よろづよ

りもおもしろく思ひてよみける。さるははかゞしく師につきて、わざと學問すゝにもあらず。何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなくて、たゞ唐の大和のくさ〳〵の書を、あるにまかせ、得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よままほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき。

かくて二十あまりなりしほど、學問しにとて京になん上りける。さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのためによのつねの儒學をもせんと

二十あまり　寶暦二年翁二十三歳の時京に上りて儒學を堀景山に學ぶ。

改觀抄　僧契沖の著、百人一首を解釋したるもの。

餘材抄　古今和歌集を註釋したるもの。二十卷。

勢語臆斷　伊勢物語を註釋したるもの。四卷。

てなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説を知り、その世に勝れたるほゞをも知りて、この人のあらはしたるもの、餘材抄・勢語臆斷などをはじめ、その外もつぎ〳〵にもとめ出でて見けるほどに、すべて歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やう〳〵にわきまへさとりつ。

釋契沖

さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた心にかなはず、その歌のさまもをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出でまじらひつゝよみありきけり。さて人のよむふりは、おのが心にはかなはざりけれども、おのが立てたよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、

人はとがめずぞありける。そはさるべきことわりあり、別にいひてん。

さて後、國に歸りたりしころ、江戸より上れりし人の、近きころ出でたりとて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居の大人の御名をも始めて知りける。かくて其の書、はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまり事ごとくあやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれ〳〵にはげにさもやとおぼゆるふしぶしも出できければ、また立ちかへり見るに、いよいよげにとおぼゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりのこゝろことばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびの有りしやう、大かたかくのごとくなりき。

冠辭考
賀茂眞淵の著、枕詞を解釋したるもの。十卷。縣居の大人賀茂眞淵。

さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢのもの、古き近き、これやかれやと讀みつるを、二十ばかりのほどより、わきて心ざしありしかど、とり立ててわざと學ぶことはなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばんとこゝろざしはすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものの説くおもむきは、みないたくたがへりと、早くさとりぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねを考へ出でんと思ふこゝろざし深かりしにおほせて、かの冠辭考を得て、かへす〳〵讀みあぢはふほどに、

田安の殿　徳川宗武。

いよ〳〵心ざし深くなりつゝ、この大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安の殿の仰せごとをうけたまはり給ひて、この伊勢の國より、大和・山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし事のありしをり、この松坂の里にも二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞きていみじく口惜しかりしを、かへるさまにも又一夜やどり給へるを、うかゞひまちて、いと〳〵うれしく、急ぎ宿りにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教を承ることにはなりたりきかし。（二の巻）

八　縣居の大人の御さとし言

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人の教をうけたまはりそめしころより、古事記の註釋を物せんのこゝろざしありて、そのことを大人にもきこえけるに、さとし給へりしやうは、「われももとより

神の御ふみ　神典。古事記を指す。

萬葉　萬葉集。我が國最古の歌集。

神の御ふみを解かんと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずばあるべからず。然るにそのいにしへのこころを得んことは、古言を得たるうへならではあたはず。古言を得んことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬葉を明らめんとするほどに、すでに年老いて殘のよはひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみを解くまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなくいそしみ學びなば、その心ざし遂ぐることあるべし。たゞし世の中のもの學ぶ

ともがらを見るに、皆ひきき所を經ずて、まだきに高きところにのぼらんとする程に、ひききところをだに得ることあたはず、まして高き所は得べきやうなければ、みなひがごとのみすめり。このむねを忘れず、心にしめて、まづひきき所よりよくかためおきてこそ、高き所にはのぼるべきわざなれ。わがいまだ神の御ふみをえ解かざるは、もはらこのゆゑぞ。ゆめしなを越えて、まだきに高き所をなのぞみそ。」と、いとねもごろになん誡めさとし給ひたりし。この御さとし言のいとたふとくおぼえけるまゝに、いよ〳〵萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、いにしへのこゝろ詞をさとりえて見れば、まことに世の物識り人といふものの神の御ふみ説ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものになんありける。（二の巻）

九　師の説になづまざる事

おのれ古典をとくに、師の説と違へること多く、師の説のわろき事あるをば、辨へ言ふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人多かんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、「後によき考の出できたらんには、必ずしも師の説に違ふとて、な憚りそ。」となん教へられし。こはいと尊き教にて、わが師のよに勝れ給へる一つなり。大方古を考ふる事、さらに一人二人の力もて、悉く明らめ盡すべくもあらず、又よき人の説ならんからに、多くの中には誤もなどかなからん。必ずわろきこともまじらではえあらず。その己が心には、今は古のこゝろ悉く明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたることも、思ひの外に、又人の異なるよき考も出で來るわざなり。あまたの手を經るまに〳〵

さきぐ〳〵の考の上を、なほよく考へ極むるからに、つぎ〳〵に精しくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきを言はず、ひたぶるに舊きを守るは、學問の道にはいふかひなきわざなり。又己が師などのわろきことをいひあらはすは、いとも畏くはあれど、それも言はざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知ることなし。師の説なりとして、わろきを知りながら、言はずつゝみ隱して、よさまに繕ひをらんは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古のことの明らかならんことをむねと思ふが故に、私に師を尊むことわりの缺けんことをば、えしもかへりみざることあるを、猶わろしと謗らん人は謗りてよ。そはせんかたなし。われは人に謗られじ、よき人にならんとて、道を枉げ古の意を枉げて、さてあるわざはえせずなん。

これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。（二の巻）

一〇　わがをしへ子に誡めおくやう

われに從ひてもの學ばんともがらも、わが後にまた善き考のいできたらんには、必ずわが説になづみそ。わがあしき故をいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんとなれば、とにもかくにも道をあきらかにせんぞ、吾を用ふるにはありける。道をおもはで、いたづらにわれを尊まんは、わが心にあらざるぞかし。（二の巻）

一一　ひとむきにかたよることの論ひ

世の物しり人の、他の説のあしきを尤めず、一むきにかたよらず、

これをもかれをも捨てぬさまに論ひをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへんとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかにそしるとも、わが思ふすぢをまげて從ふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。大かた一むきにかたよりて、他説（あだしごと）をばわろしと尤むるをば、心せばくよからぬ事とし、ひとむきにはかたよらず、他説をもわろしとはいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、必ずそれさしもよき事にもあらず。よる所さだまりて、そを深く信ずる心ならば、必ず一むきにこそよるべけれ。それに違へるすぢをば取るべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは皆あしきなり。これよければ、かれは必ずあしきことわりぞかし。然るをこれもよし、又かれもあしからずといふは、よる所さだまらず、信ずべき所を深く信ぜ

ざるものなり。よる所さだまりて、そを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあしきことをば、おのづから尤めざることあたはず。これ信ずるところを信ずるまめごころなり。人はいかにも思ふらん、我は一むきにかたよりて、あだし説をばわろしと尤むるも、必ずわろしとは思はずなん。（四の巻）

一二　前後と説のかはる事

同じ人の説の、こゝとかしことゆき違ひてひとしからざるは、何れによるべきぞと惑はしくて、大かた其の人の説、すべてうきたるこゝちのせらるゝ、そは一わたりはさる事なれども、なほさしもあらず。はじめより終まで、説のかはれることなきは、なか〳〵にをかしからぬ方もあるぞかし。はじめに定めおきつる事の、ほどへて後に、又異なるよき考の出で來るは、常にある事なれば、はじめと

かはれることあるこそよけれ。年をへて學問すゝみゆけば、說は必ずかはらでかなはず。又おのが始の誤を後に知りながらは、つつみかくさで、きよく改めたるもいとよき事なり。殊にわが古學の道は、近きほどより開けそめつることなれば、速かにこと〳〵くは考へつくすべきにあらず。人をへ、年をへてこそ、つぎ〳〵に明かにはなりゆくべきわざなれば、一人の說の中にも、先なると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生のかぎりのほどにも、つぎ〳〵明かになりゆくなり。されば、その先のと後のとの中には、後の方をぞ其の人のさだまれる說とはすべかりける。但し又、みづからこそ始のをばわろしと思ひて改めつれ、また後に人の見るには、なほ始の方よろしくて、後のは中々にわろきもなきにあらざれば、とにかくにえらびは見ん人の心になん。（四の卷）

一三　書うつし物書く事

ふみを寫すに、同じくだりのうち、あるはならべるくだりなどに、同じ詞のある時は、見まがへて、そのあひだなる詞どもを、寫しもらすこと常によくあるわざなり。また一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、その間一ひらをみながら落すこともあり。これら常に心すべきわざなり。またよく似てみまがへやすき文字などは、ことにまがふまじくたしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず。おほかたもの書くには心得べきことぞ。

すべてものを書くは、事の心を示さんとてなれば、おふな〳〵文字さだかにこそ書かまほしけれ。さるをひたすら、筆のいきほひを見せんとのみしたるは、いかなることども讀みときがたきが世に多かる、あぢきなきわざなり。つねに書きかはす消息文なども、

文字よみがたくては、いひやるすぢゆきとほらず、讀む人はた苦しみて、頭かたぶけつゝかへさひ讀めども、つひに讀みえずなどしては、こゝ讀みがたしとかへし問はんも、さすがになめしきやうなれば、唯おしはかりに心得ては、ことたがひもするぞかし。（六の巻）

一四　手書く事

よろづよりも手はよく書かまほしきわざなり。うた詠み學問などする人は、ことに手あしくては心おとりのせらるゝを、それ何かは苦しからんといふも、一わたりことわりはさる事ながら、猶あかずうち合はぬ心地ぞするや。宣長いとつたなくて、常に筆とるたびに、いと口をしういふがひなく覺ゆるを、人の乞ふまゝに、おもなく短冊一ひらを書き出で見るにも、我ながらだにいとかたはに見苦しうかたくななるを、人いかに見るらんと恥かしく胸いたく

て、若かりしほどに、などて手習ひはせざりけんと、いみじうくやしくなん。（六の巻）

一五　花のさだめ

花はさくら。櫻は、山櫻の、葉あかく照りて、細きが、まばらにまじりて花しげく咲きたるは、またたぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも、しなぐ〳〵のありて、細かに見れば一本ごとに、いさゝかかはれる處ありて、またく同じきは無きやうなり。

又、今の世に桐がやつ八重一重などいふも、やうかはりていとめでたし。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何も、あをやかに茂りたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空清くはれたる日、日影のさすかたより見たるは、に

桐がやつ　もと鎌倉の桐が谷より出でたる櫻の名。怡顏齋櫻品「桐谷一名八重一重、一名重返、花中第一品也」。

ほひこよなくて、同じ花とも覺えぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞいとめでたきを、盛りになるまゝに、やう〳〵しらけゆきて、見どころ無くなるこそいと口惜しけれ。櫻の咲ける頃までも散ることしらで、むげに匂ひなくねびれしぼみて殘りたるを見れば、げに「ありて世の中」は、何事もみなかくこそと、見る春ごとに思ひ知らるかし。白きはすべて香こそあれ、見る目はしなおくれたり。大かた梅の花は、ちひさき枝を物にさして近く見たるぞ、梢ながらよりはまされる。

桃の花は、あまたさきつゞきたるを遠く見たるはよし。近くてはひなびたり。山吹・かきつばた・なでしこ・萩・すゝき・女郎花など、とりどりにめでたし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ。あまりうるはしくしたゝかに造りなしたるは、なか〳〵にしな無

ありて世の中　古今集、讀み人しらずの歌に「殘りなく散るぞめでたき櫻花、あり て世の中はてのうければ。」

くなつかしからず。つつじ。野山に多く咲きたるは目さむる心地す。海棠といふもの、からめきてこまやかにうるはしき花なり。

そも〳〵かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人はまた思ふ心ことなるべければ、一やうに定むべきわざにはあらず。また今やうの世の人のもてはやすめる花どもも世に多かるを、かぞへいでぬは、殊更めきたるやうなれど、歌にも詠みたらず、古きものにも見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからず覺ゆかし。されどそれはた一やうなるひが心にやあらん。（六の巻）

一六　歌も文もよく整ふは難き事

近き世の人の歌ども、文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目とまることは、程々にあまたあんめれど、それはたいかにぞや覺ゆる所は交りて、大方瑕なくとゝのひたるはをさ〳〵見えず。これ

を思へば、後の世にして古をまねぶことは、いと〳〵難きわざにんありける。古の賢き人々のだに、これはしも露の瑕なしと覺ゆるは、多かる中にも少くなんあれば、まして今の人のは、いさゝかなる瑕をさへに言ひ立てんは、あながちなるにやあらん。されど、同じくは、人のいさゝかも難ずべきふしまぜぬさまにこそはあらまほしけれ。よき程にて、心をやるをば、唐土のいにしへの人も、よからぬことに言ひ置きけるをや。（八の巻）

一七　道のひめごと

いづれの道にも、その大事として世に廣く洩さず、祕めかくす事多し。まことにその道大事ならば、殊に世に廣くこそせまほしけれ。餘りに重くしてたやすく傳へざれば、狹くなりて絶え易きわざぞかし。そも濫りに廣くしぬれば、その道輕々しくなることといふなるも、一わたりはことわりあるやうなれども、たとひ輕々しくなるかたはありとても、なほ世に廣まるこそはよけれ。廣ければ自ら重きかたはあるぞかし。いかに重々しければとても、狹くかすかならんは、よきことにあらず。まして絶えもせんには、何の言ふかひかあらん。されど近き世に、道々に祕傳・口訣などいふなるすぢ、多くは道を重くすといふは、たゞ名のみにて、まことは人に知らさずて、己一人のものにして、世に誇らんとする私のきたなき心、又それよりも勝りてきたなき心なるぞ多かる。さる類も、もろ〳〵のはかなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるはしくはかゞ〳〵しき道には、さることあるべくもあらず。（九の巻）

一八　物學びは其道をよく擇びて入初むべき事

物まなびに心ざしたらんには、まづ師をよく選びて、その立てた

るやう、教のさまをよく考へて、從ひ初むべきわざなり。智にぶき人は更にも言はず、固より智ときり人と雖も、大方始に從ひそめたる方に、おのづから心は引かるゝわざにて、その道のすぢわろけれど、わろきことをえさとらず、又後にはさとりながらも、年來の習はさすがに捨て難きわざなるに、我とかいふ禍神さへ立ちそひて、とにかくに強ひごとして、なほそのすぢを助けんとするほどに、終によきことは、えものせで、ひがごとのみして身を終ふる類など、世に多し。かゝる類の人は、勉めて深く學べば、學ぶまに〳〵、愈、わろき事のみ盛りになりて、おのれ惑へるのみならず、世の人をさへに惑はすことぞかし。かへすがへす始より師をよく選ぶべきわざになん。

（十二の巻）

一九　おのが京のやどりの事

享和の初（享和元年四月。宣長七十二歳の時。）

宣長、享和の初めのとし、京に上りてありしほど宿れりしところは、四條の大路の南づらの、烏丸のひんがしなる所にぞありけるを、家はやゝ奥まりてなんありければ、物のけはひうとかりけれど、朝のほど、夕暮などには、門にたちいでつゝ見るに、道もひろく晴々しきに、行きかふ人しげく、いとにぎはしきは、ゐなかに住みなれたる目うつしこよなくて、目さむる心地なんしける。京といへど、なべてはかくしもあらぬを、この四條の大路などは、殊ににぎはしくなんありける。天が下三ところの大都の中に、江戸・大阪は、あまり人のゆきき多くらうがはしきを、よきほどの賑ひにて、よろづの社々寺々など、古のよしある多く、思ひなしたふとく、すべて物きよらに、よろづの事みやびたるなど、天の下に住まままほしき里は、さはいへど京をおきてほかにはなかりけり。（十三の巻）

國語讀本 卷七終

昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月廿一日訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十七日改訂再版發行
昭和五年二月十八日改訂六版發行

昭和改訂版 國語讀本

卷數	定價	昭和五年度臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十七錢
五、六、八	各金四十六錢	金七十五錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十三錢
四	金四十四錢	金七十二錢

不許複製 上田

編者 上田萬年
同 榮田猛猪
同 鹽野新次郎
印刷兼發行者 株式會社啓成社
右代表者 布津純一
印刷所 東京市芝區芝浦町二丁目三番地 日進舍

發行所 東京市京橋區加賀町一番地 株式會社 啓成社
電話銀座(57)二四九四番
振替東京一二〇五五番

山陽中學校
四一類三十九番
和田廣壽